琉球大学学術リポジトリ

2007－2011
日本・ベトナム共同授業研究会の歩み　～自己の尊厳・地域の尊厳から、「子ども中心主義」を問い返す～

メタデータ	言語:
	出版者: 村上呂里
	公開日: 2012-03-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 村上, 呂里, 西岡, 尚也, 善元, 幸夫, 那須, 泉, Ta Van Thong, Dao Thi Van, Nguyen Thi Nhung, Tran Thi Loan, Murakami, Rori, Nishioka, Naoya, Yoshimoto, Yukio, Nasu, Izumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24032

第Ⅱ部

第２回☆共同授業研究会 in　ベトナム・クックドゥオン小学校

（第１回）　2009年12月27日

◇第１時間目　ベトナム語（１年生）

（授業者　Dao Thi Thao）

◇第２時間目　地理「南ベトナムの民族」（４年生）

（授業者　Dinh Thi Minh　Hoa）

◇第３時間目　「太陽と山に住む人たち（１）」（４年生）

（授業者　善元幸夫／通訳　那須 泉）

◇授業研究会の記録

（第２回）　2010年 9月 8日

◇第１時間目　「世界の食べ物」（２年生）

（授業者　西岡尚也）

◇第２時間目　「太陽と山に住む人たち（２）」（５年生）

（授業者　善元幸夫／通訳　那須 泉）

◇授業研究会の記録

２００９年１２月２９日　日本・ベトナム共同授業研究会・第１時間目の授業

「ベトナム語(Tieng Viet)」

□対象：タイグェン省ボーニャイ郡クックドォン小学校１年生　14名

（男子５名、女子９名。全てタイー族）

□授業者：Dang　Thi　Thao 先生（女性、キン族、30代前半）

□教科書：小学校１年生上「ベトナム語教科書」(『Tieng Viet 1』Tap　Mot,Nha Xuat Ban Giao Duc,2008)、第68課（138-139頁）

BÀI 68

ot
hót

at
hát

tiếng hót　　ca hát

bánh ngọt
trái nhót

bãi cát
chẻ lạt

ot　at　tiếng hót　ca hát

前半は、ot、at　hot　hat を区別し、各々の発音と文字を正確に対応する練習を繰り返し行った。Thao 先生が発音し、生徒はそれに対応する単語を文字として表す。数年前までは小さな黒板を用い、白墨で書き込んでいたが、今回はアルファベット文字や声調記号を差し込んで単語を作成する教具を用いていた。単語を作成できるとその教具を高く提示し、先生が文字と表記が合っているか、声調記号を正確に用いているかどうかを確認する。ここまでは従来通りの一斉授業スタイルで、テンポ良く（いいかえれば速くできない子どもにとっては急かされて）行われていた。筆者が見るかぎり、全員が正しい表記を指し示していた。

動きがあったのは、後半である。

（1）「cho　lat」という文字を黒板に書き、先生がタイー語で「何というおかし？」と聞く。とたんに子どもたちは目を輝かせ、活気づき、各々にタイー語で答えていた。

（2）ある果物の写真を示し、「この果物はタイー語で何というの？」「どこに生えているの？」などいくつか重ねて質問を行う。親しみ深い果物であるようで、子どもたちはベトナム語を用い、楽しそうに答えていた。

（3）竹を割いて編んだ篭を教壇におく。「何に使うんですか」などいくつかの簡単な質問をベトナム語で問い、子どもたちはベトナム語で答える。そうした過程を経て、その篭を表すベトナム語 trai nhat を、教具を用いて作成させる。

cho lat と trai nhat　で共通している発音の表記に下線を引いて確認する。

（4）hat（歌う）という単語を提示し、ある生徒を前に出させ、実際に歌ってみせる。みんなで拍手をする。

（5）ゲームに移る。

今日、勉強した ot　と at　とが使われた単語がバラバラに入っている箱を生徒に提示する。「箱から同じ仲間の単語を取り出し、グループに分けてごらん。」と先生が指示する。子どもたちは全員、さっと前に出て、単語を一つずつ取り出し、二つのグループに分けた。

それぞれのグループについて、皆で確認する。

以上で、授業は終了した。

（感想）

まず注目されたのは、これまで私たちがベトナムの授業で毎回見てきた大きな定規よう（1メートル弱くらい）の教具が使われていなかったことだ。これは、生徒を集中させる

ために、５分ごとにバシッと黒板をたたくために使われる。子どもたちをビクッとさせるかなり威圧的な教具であり、一斉授業・教師主導型授業、権威的教師像の象徴ともいえる。これが使われず、かわりに日本でも使われる指し棒（３０センチメートルくらい）が黒板を指す際、使われていた。ここにもベトナムにおける教育改革の息吹が見える。

前半は、これまで私たちが見てきたのと同じ一斉注入式の授業である。教師と生徒の間で一定の距離感があり、テンポ良く授業が進む。子どもたち全員に確かなベトナム語能力を習得させようとする姿勢が感じられた。後半、これまでに見たことがないような子どもたちが活発に動く授業風景が見られ、積極的に学習に参加させようとする工夫が見られた。

見た直後は、「ベトナムの授業も変わった」と率直に感心した。

基礎（発音と文字表記）の徹底的習得を踏まえ、生活に根ざした実物（篭や果物の写真）を学習材とし、語彙を広げていく展開、「歌う」など身体表現を伴い語彙を習得させる工夫、ゲームにより活発に子どもたちを参加させる工夫など、非常に練られた授業展開と映った。

しかしながら、しばらく経つとどこか“つくられた不自然な活発さ”感をぬぐうことができなかった。あらかじめ十分練習された劇を見るかのような、意外性のない不自然さである。 外国人である私たちや指導的立場にあるタイグェン師範大学の教員が見に来るということで、それは致し方ないことなのかもしれない。Thao 先生は、新らしい素敵なスーツにハイヒールで授業をされ、授業後はすぐ普段着に着替えられた。相当な緊張感のもとに授業をされたようた。「ハレ」の場であったのであろう。

心苦しい思いもしたが、これが出発点である。これまでに参観した授業に比べれば、たしかに「ベトナムの小学校の授業は変わった」と印象づけるに十分な授業であった。

（文責　村上）

2009年12月29日日本・ベトナム共同授業研究会・第2時間目の授業（文責：西岡尚也）

「地理（Dia li）」　単元：南ベトナムの民族

□対象：タイグェン省ボーニャイ郡クックドォン小学校4年生、26人

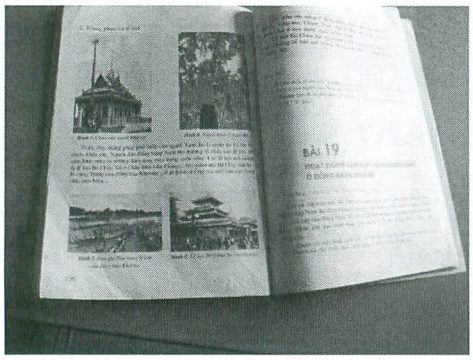
□授業者：Dinh Thi Minh Hoa　先生　（女性）

□単元：南ベトナム・メコンデルタ地帯の少数民族の祭礼と服装

□授業時間：45分間

《授業の展開》

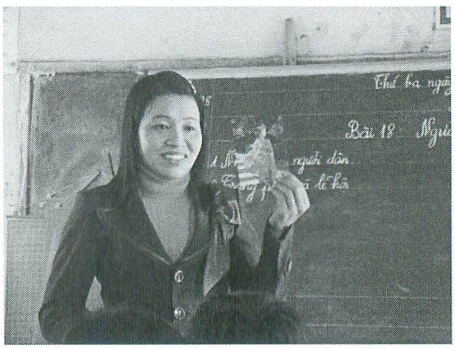
開始のあいさつ。本時のテーマを黒板に記入「18 章」。メコンデルタの位置をベトナムの国土地図で確認させる。



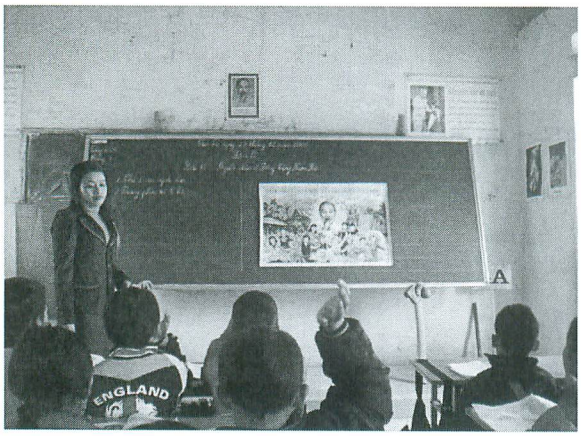
①教科書 18 章メコンデルタの民族チャム族についての説明。建物・寺院（左上）、ハーリー競争（左下）

②写真を見せながら、この地域の少数民族の集落・住居・服装などを、クックドォン小学校地域と比較させる。

③グループに分かれて、この地域の集落・祭礼・人びとの暮らし・民族衣装などについて、気づいた点をあげさせる。



④日本の絵はがきを見せて、琉球沖縄の民族衣装が、キン族のものとよく似ていることを指摘。



⑤本時のまとめ

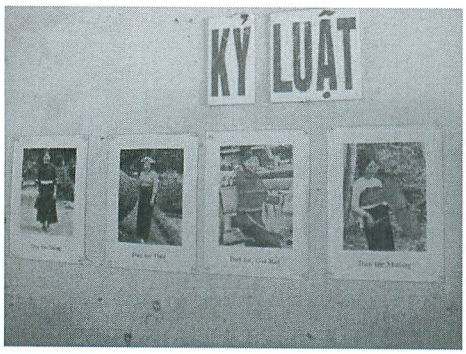
黒板にホーチミンの肖像を囲んだ、少数民族（衣装や持ち物が異なる）の人びとと、その代表的な住居の「ポスター」を掲示する（左の写真）。

「何族の衣装」「何族の住居」であるかの発問があり、代表が前に出て答えることで、授業が終了した。

《全体の感想》

自分たちの国の一地方である、「南部メコンデルタ地帯」をあつかった国内地理の内容であった。日本式にいえば「関東平野の人びとの暮らし」というイメージである。ただし多民族国家ベトナムという視点から「祭礼」「服装」にポイントが置かれていた。

子供たちは教科書の記述と、写真を参照し、自分たちと「同じところ」「ちがうところ」について意見をまとめる。 グループの代表が、黒板に貼られた模造紙の表に記入しながら、「同じ点」「違う点」を発表していく。自分たちと、メコンデルタの地域の人びとの生活を楽しみながら比較し学んでいた。さらに沖縄の衣装・闘牛・ハーリー競争などの写真が紹介された。子供たちは「日本のゲスト」についても、タイムリーに興味が持てたと思う。従来のベトナムでは「講義・伝達中心」の授業で、グループ学習導入は最近であるという。他にも今回の授業では子供たちの参加を促すための工夫（地図・写真・グループ学習・絵はがき・ポスター活用など）が随所にされていた。私が最も注目したいのは、教室の壁に



掲示されていた民族の写真（左）である。これは 54 の民族が住むベトナムにおいて、日常から子供たちを違和感なく多文化共生教育に導く工夫である。そして、子供たちが異なる民族についてすでにかなりの知識と情報を持っていることがわかった。授業時間だけでなく、歌・踊り・祭りなどの祭礼や行事に積極的に参加していることを校長先生から聞いて納得した。このような他民族に対して差別や偏見を持たせない「自文化への誇り」と「共生への工夫」は、多民族国家ベトナムが長い歴史の中で獲得した手法である。ここから日本の教育が学ぶことも多いと思った。

単元・太陽と山に住む人たち(1)

クックドゥオン小学校第４学年年学習指導案（１）

授業日　2009 年 12 月 27 日

指導者　　善元幸夫

研究テーマ

多文化共生を生きる価値観の形成を築く教育を求める

――マイノリテイの自尊感情の形成のために――

１．単元名・単元の構成

（１）単元名「太陽と山に住む人たち」（１時間）ベトナム語通訳付き

―子どもを中心にすえた授業創造にむけて―

（２）単元の構成

１）太陽ってなんだろう！太陽の歴史

太陽から地球が生まれ無生物の地球が生まれ、やがて生物が生じた。太陽からみた地球の歴史は人間の想像力を越えるダイナミックなもので、偏見や差別を取り除くは、子どもたちが今おかれている状況から解き放されなければならない。

２）現在の私たちホモサピエンスはアフリカに出現し、世界各地に広がって行った。では人と動物の違いはなんだろうか。そしてベトナムの５４の民族はどこからやって来たのだろうか。

そしてここにいるみんなはどこから来たのか。

3) 村の生活をもう一度見出し、タイー族とムン族はお互いに生活や文化・週間が異なる。しかし共通なところはないであろうか。また日本人とベトナム人はどうであろうか。その意味を考え、「自尊の感情」の形成を培い、現代を生きるキュウドアングの子どもと、太陽・村との対話を試みたい。

3　児童の実態

Cuc Duong 小学校（ハノイ北西９０キロ　都市タイグエンから２時間の山村）

１）教員数：**18** 名

生徒数：**240** 名

1)　学級実態

・**4** 年生のクラス（**28** 名父兄の職業：ほとんどが農林業）

少数民族出身生徒（**18** 名がタイー族、**10** 名がモン族）

就学率：**100** ％　卒業率：約 **82** ％（注：ベトナムの小学校は **5** 年制）

・放課後

大半の生徒は帰宅し両親の手伝い。（牛を世話をしたり、自習する生徒もいる）

一番遠くは **3km** 先から通学

３）生徒が直面している問題

フモン族の生徒はベトナム語があまりわからないので各科目を理解しづらい。また遠隔地から通学する生徒は、父母が送迎する車両（自転車やバイク）を持っていないので毎日歩いて家と学校を往復しなければならない。

４）児童の日本認識

地理の授業やテレビ番組で、アジアの一国で桜がきれいな国

＊教員が今一番気になっていること

通勤距離が長すぎる、学校までの道路が非常に悪い、子どもが小さいのに十分面倒を見てあげる時間がない、教材作りに使用するパソコンを購入する経費がない。

４．授業の展開　　総合学習（国際理解）

授業のポイント１

・人間と太陽の歴史・今あなたはどこにいるのか！

子ども自身の未来を考えるため、太陽の進化を知り、その意味を考える。

①　太陽誕生のお話をしよう

授業のポイント２

・太陽の進化と生物の歴史から自らのいき方を考える

①　光合成ってなんだろう（子どもの生活の中から考える）

① 人間と人の違いは何だろう

授業のポイント３

・私たちはどこから来たのであろうか

① 人の移動の歴史を知る。

② 人はアフリカから世界に広がっていった。

授業のポイント４

① タイー族とモン族の違いは何だろう？

② 日本人とベトナム人の違いは何だろう

③ 私たち人はみな同じだがそれぞれの生活習慣文化をもつ

（授業を進めるにあたって）

授業は机を排除して対話型の授業にした。また自分の考えをみんなの前で発表するのが苦手な子のことを配慮して、グループでの話し合いも取り入れた。また子どもの意見を尊重するためにグループの話し合いの意見はすべてベトナム語で板書した。黒板を使った提示物（「私たちはどこから来たのか」）については、日本語とベトナム語で書いた。

６． 授業の展開「太陽と山に住む人たち」

（1）ねらい（例示）

時間		主な活動	教師の支援	評価
		私たちは太陽の子ども ・地球の進化（原始地球ってなんだろう！） ・緑（植物）が動物を生んだ ・生物進化（図1） ・人と動物はどこが違う？	「宇宙にはいろんな	
		人類はどこからきたのか ・多様な人類（図2） ・アフリカから始まる人類の大移動（図3） ・ホモサピエンス	「２０万年前、いろいろな種の人がいたよ！」 「アフリカからヨーロッパへ アフリカからアジアへ 中央アジアからシベリアへ	

		・ベトナム人はどこから来たのだろうか	中央アジアから中国へ 中央アジアからインドへ 中央アジアから東南アジアへ（図３）」 ・ベトナムの５４の少数民族 「モン族はどこから来たのか？ タイ族はどこから来たのか？」 「私たちはどこから来たか？	
		・ホモサピエンスとボイジー 人間ってなんだろう？ ・　山の仕事と地球・環境 ・　農業について	・環境に適していた人が滅びた！	
		あなたと隣の人のちがいは？ 人はどこへいくのか	ｙタイー族・モン族　　日本人	

＊この授業案は日本で作成されたものでベトナムのハノイで民族楽器を入手して少数民族がどのように生まれたかをみんなで考えた。

＊そのときベトナムの少数民族の誕生のことが書いてある教科書資料として使用した。

＊通訳は同時通訳で授業者と通訳者（那須泉先生）とは打ち合わせは何度も行い部分的には意訳して学習者に話の真意が伝わるようにした。

授業記録・「太陽と山に住むたち(1)」

授業者　善元幸夫・通訳　那須 泉

善元「(地球儀を手に持って) 日本から来ました。日本どこかな。どこ？日本。」

C「(地球儀の日本の位置を指差しながら) ここじゃないでしょうか。」

善元「すごい！ここ。日本から来ました。」

～拍手～

善元「先生はベトナムどこだか知ってるよ。ベトナムはここ？ここだ。(地球儀を指差す)」

C「ちがうよ。ちがうよ。」

善元「あっ！ここ！(地球儀を指差す)」

C「ちがう。」

善元「ちがうの～。教えて、ベトナムどこ？ベトナムどこ～。」

C「(地球儀のベトナムの位置を指差しながら) ここです。」

善元「お～、拍手。」

善元「お～、拍手。」

～拍手～

善元「先生は東京から来てね、東京大きいんですよ。先生の町には１１４の国の人がいます。世界にはいくつの国があるか知っていますか？世界にはね、１９０の国があります。その内、先生の町には１１４の国の人たちがいます。そこで質問です。１番。私の学校にはいくつの国の人がいるでしょうか？いくつの国の人がいるでしょうか？」

C「たくさんです。」

善元「たくさんですよね。１４の国の人がいます。１４の国の子供がいます。（写真を見せながら）ヨーロッパの国から、フランスから来てる子もいますよ。アメリカから来てる子もいますよ。それではね、今日の授業はね、こういう話です。今日の１番大事な話に入るね。地球のすべてのものにはね、始まりと終わりがあります。なんだろう？なんだろうね？（教室の外を指差しながら）ちょっと外見てごらん。木があるね。木って１番最初はちっさいよね。で、だんだんだんだん大きくなるよね。最後どうなるの？」

C「最後は年をとって死んじゃいます。」

善元「そうだよね。地球のすべてのものはね、始まりと終わりがあります。じゃあ、聞きます。地球の始まりって何？地球の誕生日知ってる人？知ってる人？（一人の生徒を指して）君は知ってるんじゃないの？」

クェン「わからない･･･。」

善元「見せます。地球の始まりでーす。ダラララララララ･･･えっ？何これ（写真を隠している紙をずらして、少しだけ見せる）。」

C（全員）「マッチョイ（Mat Troi：ベトナム語で太陽）。」

那須「これおひさま？」

善元「マッチョイ！マッチョイがね。よーく見てごらん（写真を隠している紙をさらにずらす）。」

C「これ、地球かな？」

善元「誰？当たり。これ、地球です。いいですか。１番初めは地球はありません。はい、そして地球が生まれました。だんだん地球がマッチョイの周りをグルグルグルグル回ります。」

C「これ月かな？」

善元「うん、いいとこに気がついたね。ちがうよ。いきます。これ何？」

C「月です。」

善元「(首を横に振る。) よーく見ててね、よーく見ててね。(写真を隠している紙をはずす。)」

C「地球です。」

善元「地球はね、昔はこうだったんです。いいですか、すべてのものには始まりと終わりがあるよ。このとき、生き物いた？」

C「いないでしょうね。」

善元「いないよね。いないよ。で、ここのときに生き物が出てきました。月はね、この周りをクルクルクルクル回ってます。はい、じゃあみなさんに聞きます。真っ赤に燃えてたときは生き物いなかったよね。1番最初の生き物見たことある？」

クェン「恐竜かな？」

善元「恐竜！いいとこに気がついたね。恐竜だね。(恐竜の絵を見せる。) 誰？恐竜って言ったの。(答えた子どもの顔を見ながら) 君、頭良いね。はい、いいですか。命の始まりは海でした。1 番最初の生き物、こんな生き物でした。みんな、見たことある？見たことある人？ (絵を見せる。)」

C「ないです。見たことないです。」

善元「だってこれ1億年前だもん。はい。だんだん、だんだん新しいものが出てきます。ね、すこーしちがうよね。そのうちにね、だんだん、だんだん海から陸上に住んできます。ほら！ (絵を見せる。) ちょうどこの頃になるとね、」

那須「猿がいるねって言ってますね。」

善元「そうだよね。あっ！誰？猿って言ったのは。」

C「木のところにいるね。」

善元「今、先生はね、猿の話をしようと思ったの。(猿を指摘した子どもに近付いて) すごいね、君は。この頃ね、みんなも知ってるこういう恐竜もいました。(写真を見せる。) じゃあ、この次どうなるか知ってる？この次はね、どっか行っちゃった。この次は･･･空飛んじゃうのもいます。」

C「恐竜が空飛んでるんですか？」

善元「そうだね、こういう頃にね。そう、恐竜、みんなも知ってるよね。そうそうそう。じゃあね、昨日、先生はハノイでこんなの買ってきました。(たくさんの動物が写っている写真を黒板に貼る。) ベトナムはいいね。こういう良い写真がいっぱいあるよ。あっ！いくらかって書いてある。はい！じゃあ、聞きます。この中に人がいる？」

C「いません。」

善元「いないよね。人はね、」

C「でも猿はいます。」

善元「そう！猿いるよね？じゃあさ、人って、始めと終わりがあるって言ったじゃない。１番初めの人の始まりって見たことある？」

C「チンパンジーじゃないか。最初の人間はチンパンジーじゃないか。」

善元「１番初めの人見せるよ。最初、１番最初。（写真を隠しながら持ってきて、隠している紙の上を少しだけずらす。）１番最初、どこに住んでたと思う？」

C「だぶんチンパンジーが出てくるんじゃないかな？」

善元（首を横に振る）

C「じゃあ猿だ！」

善元「これ猿？（写真を全部見せる）。」

C「人だ。」

善元「人？人だって言ってるの誰だ？人と思う人？これ、猿だと思う人？これね、２００万年前に生まれた人なんだって。２００万年前。人と猿の違いってわかる？」

C「猿は４つで歩きますけど、人間は２つで歩きます。」

善元「拍手！」

～拍手～

善元「じゃあね、２分間あげるから隣の人と話して、人と猿の違いを話しあってください。で、先生に教えてください。はい、２分間。」

～子どもたちは話し合う～

善元「はい、時間です。さぁ、誰か、グループで、誰でもいいよ。グループで言ってくれる？ここのグループとここのグループ。」

C「普通、猿は木の上で暮らしているけれども、人間は土の上で暮らしている。」

善元「なるほど。すごい！すごい！はい、他にいるかな？」

C「猿はしっぽがあるけれども、人間はしっぽがありません。」

善元「おぉ！しっぽって何であるの？しっぽって何である？」

C「なぜならば、猿は動物だからしっぽがあるんです。」

善元「あのね、人間も昔、しっぽあったんだよ。みんな、後ろ、ちょっとここ触ってごらん。（自分のおしりを指す。）ここにね、しっぽがあったんだよ。それでね、しっぽはね、うんちすると汚れちゃうからきれいにしとくの、いつも。こうやって。はい、はい次。次どうぞ。」

C「猿には毛があるけど人間にはありません。」

善元「拍手！」

～拍手～

善元「人間には毛がないって言ったけれども、みなさんの中に毛がある場所ってどこ？」

C「全然ないんじゃない。猿と比べると少ない。」

善元「そう。ちょっと来てごらん。（男子生徒を一人前に出す。）この子のどこに毛があるでしょう？」

C「頭。」

善元「はい、頭に毛があります。（生徒の頭を触る。）足に毛があります。（生徒の足を指して見せる。）それから、目。（自分の目の周りを指す。）ここにも毛があります。鼻の中にも毛があります。覚えといて。いいですか。動物も人間も必ず意味があるんです。ここに毛があるのは意味があるんです。（生徒の頭を触る。）なんででしょう？人間は、頭が１番大事です。だから、頭を守ります。目にゴミが入ります。目にゴミが入らないように、ここで守ります。で、ここから落ちちゃったら、ここで守ってくれます。（自分の目の周りを触る。）はい。悪い空気を吸わないようにここに鼻があって守ります。寒いと、暖かくするために毛があります。人間は、服を作ったから、ここの毛は少なくなりました。はい、そうだね。じゃあ、次お願いします。人間と動物の違いって何かな？まだあるんだよ。さっき、手あげてたよね。」

C「猿は、食べるものが、主要な食べ物が葉っぱですが、人間にとっての主要な食べ物は葉っぱではありません。」

善元「すごい！すごい、これは。」

～拍手～

善元「さっきさ、４本足って言ってたでしょ、誰か。誰が言ってくれたんだっけ？（答えた生徒の方を向いて）そうだよね。猿は４本足で、人間は立ったからどうなった？」

C「僕にも言わせて！僕も言いたい！」

善元（手をあげた男子児童を指しながら頭を下げる。）

C「猿は、言葉を喋れないけど、人間は喋ることができる。」

善元「すごい！」

～拍手～

善元「何で君は先生が言おうと思ってたこと言っちゃったの。（発言した児童を指差して）すごい！先生だよ、先生。言葉だよね。言葉なんですよ。それからね、もう１つね、足を立ったから手が空いてきました。手で何する？手で何する？」

C「ものをつかみます。」

善元「ものをつかむ。手で道具を作る。ほら、見てごらん。（写真を見せる。）手でね、火を使いました。すごいね。それからね、いいですか。人間はね、ちょっとこれ見てくれる？（写真を見せる。）」

C「象だ。象だ。」

善元「みーんなで力を合わせて、象をやっつけることもできました。それから人間はね、おなかが空いて食べ物がなくならないために、こんなことも考えました。それからね、人間はね、頭が良くなりました。（写真を見せる。）足跡探して、動物のところに行ったりしてるでしょ。」

C「足跡を見つけて狩猟に行くんだね。」

～拍手～

善元「じゃあね、今度はうんと難しい問題いくよ。すべてのものには始まりと終わりがあります。（地球儀を持ってきて）人間は、どこから生まれたんでしょう？ここ？ここ？」

C「その問題の答えは土からです。」

善元「おぉ～。よく知ってますね。じゃあ、聞くよ。どこの土？」

C「北極とか南極とかの土だと思います。」

善元「ほぉ～。近いよ！近いよ、答えは。いい？見せますよ。見せます。人間の始まりはここだったんです。人間の始まりがどこだったか見せます。ここです。（地図の書かれた大きな模造紙を黒板に貼る。）みなさん、一緒にこれ読んでください。さん、はい！」

C全員　～模造紙の見出し語を読む～「人類はどこからきたのか」

善元「もう１回！」

C全員　「人類はどこからきたのか」

善元「もう１回！（さっきより大きな声で）」

C全員　～先生の声に合わせてさっきより大きな声で読む～

善元「よし。これ何？これ何？ほら、何これ？何？」

C「やじるしです。」

善元「何のやじるしか？大学の先生、村上先生に聞いてみよう。お願いします。」

村上「はい。ベトナムに住んでいるみなさんも、日本に住んでいる私たちも、みーんなみーんなご先祖様を、ずーっとずーっとたどっていくと、始まりはアフリカなんです。１０万年前。この矢印に沿って、こんなふうにだんだん移動していったんですね。

で、ベトナムはここですよね。ベトナムには、５万年前にこうやって（矢印をなぞりながら）来ました。こちらからも移動してきました。そして日本にはこうやって移動しました。最後はこうやって（矢印をなぞりながら）アメリカに移動しました。」

善元「はい。ありがとうございました。拍手。」

～拍手～

善元「じゃあ聞きましょう。みなさん、一生懸命ベトナムの教科書で勉強してますか？この本、覚えてる人？（ベトナム語の教科書を出して見せる。ひょうたんから多民族が誕生し、ベトナムが生まれたというベトナム創世民話が掲載されている。）」

C「勉強しました。」

善元「ベトナム人ってどこから生まれたの？どこから生まれたの？ベトナム人は。」

C「ひょうたんから生まれました。」

善元「ひょうたんね。（ひょうたんの写真を見せる。）みんな、生まれたときの音って聞いたことある？」

C「聞いたことあります。」

善元「クェンさん（生徒の名前）。（名前を呼ばれた生徒が前に出てくる。）触ってごらん。何？これ。（生徒にハンカチで隠したひょうたんを持たせる。）触ってごらん。（ハンカチからひょうたんを出す。）ベトナムってひょうたん多いよね。昨日お酒飲んだときもひょうたんで飲んでた。さあ、これを使って、みなさんがベトナムの５４の人が生まれた音を聞かせます。音を聞かせる人を紹介します。ありがとう（前に出ていた生徒を席に戻す）。ベトナムと沖縄は親戚です。沖縄にはこれを吹ける人がいます。誰でしょう？儀間知子さんです。儀間知子さん。はい、どうぞ。拍手。」

～拍手～

善元「この人が、ベトナムの５４の民族が生まれたときの音を聞かせますから、みなさん、目をつぶってくれる？目をつぶって。考えてね。出てくるぞ。１から順に出てくるぞ。５４まで出てくるぞ。」

～演奏～

善元「はい、目開けて！見えた人？ひょうたんからいろんな民族が見えた人？」

C全員「見えた！」

善元「見えた！ありがとう。儀間さん、何か言ってください。」

儀間「Tre con cua Mat Troi（ベトナム語でみんな太陽の子ども）。」

善元「何言った？もう１回。もう１回。書きます。（黒板に貼られた模造紙を外す。）良い言葉を書いてくれますよ。すべてのものには、始めと終わりがあります。それで、

私たちは…何でしょう？（儀間さんが黒板にベトナム語で字を書く。）かわいいですね。」

C「子どもです。子ども。」

善元「じゃあみなさん、お隣の人見てくれる？お隣の人見てくれる？」

C「はい。」

善元「はい、見たよね。聞きます。この人、はい、この人。（本の１ページを開いて見せる。）先生、よく見るよ。はい、次。この人。（先程とは違う写真を見せる。）ちょっと来てくれる？（フモン族の民族衣装を着た女子児童を二人前に出す。）そうだね。もう１度みなさん、隣の人見てください。みんな、顔は似てるけど違うよね。ありがとう（女子児童たちを席に戻す）。フモン族の人もタイー族の人も、顔は似てるけど違うよね。何が違うんだっけ？言葉とかだよね。じゃあ今度は、日本から来た人たち見てください。日本から来た人、立ってください。みーんなね、みーんな同じなんだよね。似てるよね。」

C「同じです。」

善元「ちょっと違うけど、同じだよね。」

C「そうです。そうだ、そうだ。」

善元「はい、じゃあ読みましょう。みんなで、はい。」

C「Tre con cua Mat Troi（みんな太陽の子ども）。」

善元「はい、沖縄のね、沖縄の言葉で素晴らしい言葉があります。」

村上「いちゃりばちょーでー(行き会えば皆兄弟)。」

善元「いちゃりばちょーでー。いちゃりばちょーでーっていう言葉があります。この意味、どんな意味か覚えてください。さんはい。」

C「(ベトナム語でいちゃりばちょーでーの意味を言う)。」

善元「はい、これで今日先生の授業は、私の授業は終わります。最後までみなさん、私の話を聞いてくれて、どうもありがとうございます。」

C「(全員起立して）ありがとうございます。」

善元「また会いましょう。また会いましょう。はい、終わりです。」

～生徒たちがベトナム語の歌を歌う～

Loan 校長「アリガトウ（日本語で言う)。」

C「アリガトウ。」

～拍手～

善元「先生からのお土産です。先生は…（自分のおなかをたたく。)」

善元「ベトナムは昔、相撲がありましたね。」

C「知ってます。」

善元「先生も相撲取りです。（自分のおなかをたたく。）」

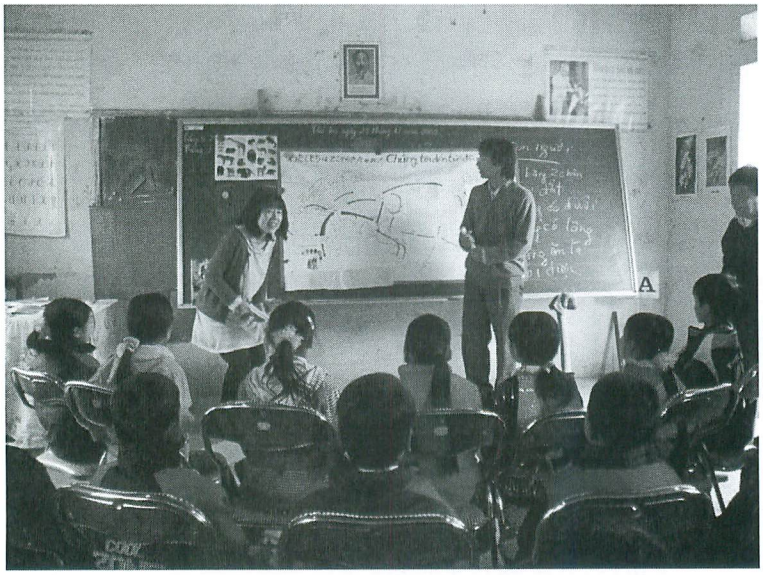
～子どもたちが笑う～

善元「日本にも相撲があります。日本では、こうあります。（おみやげを配る。）日本にも相撲があります。はい、これは先生使ってください。日本の遊びです。（おみやげを黒板にも貼る。）みなさん、使ってください。これを見て、時たま先生のこと思い出してね。ありがとう。」

C「先生、ありがとう。」

善元「はい。ありがとう。」

C 全員「（みんなで声を合わせて）本当に先生、ありがとうございました。



人類の誕生から移動の「道」を説明している場面

第1回日本・ベトナム共同授業研究会

２００９年１２月２９日昼食後　　１４時～１６時
クックドゥオン小学校校長室にて
参加者　Loan 校長、Tao 先生、Hoa 先生、Nhung 先生
善元、西岡、村上
通訳　那須、**記録**　儀間

村上「今日は、先生方お忙しい中、日本から来た私たちのために素晴らしい授業をしていただき、また、こうした共同の授業研究会をもっていただき、大変ありがとうございます。日本から来た私たちとベトナムの先生方が一緒に共同で授業研究会をもてるということは記念すべき日だというふうに思っています。率直に意見交換をして、お互いの国でより良い授業を目指していきたいと思います。それでは、まず今日の授業につきまして、善元先生の方からそのねらいなどについて、善元先生ご自身の授業のねらいなどについて少し、説明していただきます。」

善元「今日はどうもありがとうございました。私の授業を聞いていただきまして、非常に光栄に思っています。私は韓国と教育交流を１５年やっています。主に、環境教育とか歴史教育とかを１５年間やっています。日本と韓国は歴史的に関わり合いが深く、特に日本がかつて植民地にしたっていうこともあり、非常に重い思いがあって交流してきました。

今回ベトナムに来るときに、私の授業はここで通じるんだろうか、と私は心配してきました。二つのことを感じました。

一つはですね、こんなにこうベトナムの人が温かく、本当に十年来の友人のようにしていただいたっていうことが、私にとっては何よりも嬉しいことです。

もう一つは、今日１時間目と２時間目に授業を見させていだきまして、非常に深い授業を見せていただいたってことで、感動しております。実は私たちの学校も先ほどお話したように 14 の国の子どもたちがいまして、子どもたちはどんどん自分の母語を忘れていくんです。特に今日の１時間目の言語をどう、少数民族の言語を伝えるかっていうことは私も言語教育を 20 年以上やっていますので、非常に工夫

された、高い水準の授業だったのではないかな、と思います。

２時間目の授業を見たときですね、うらやましいと思いましたね。本当に少数民族の、他の民族の子どもたちのことをあれだけ、ここの民族の子どもたちが知っているっていうことは、日本では考えられないことです。少数民族のね、沖縄、アイヌの問題がありますけど、やっぱり日本の社会で、やっぱり偏見の中であって、今日素晴らしい授業がされたということに、私は教えられました。ありがとうございました。

最後に一言、私の学校の子どもたちはですね、日本に来て、外国から来たわけですけれども、どんどん、どんどん母語を忘れて日本語しかできなくなるんですよね。で、親は日本語が上手く喋れないんです。家族の中でコミュニケーションが取れないってことは限りなく子どもに精神的な不安を抱えているっていうのが、私の大きな悩みです。子どもたちが自分を言葉ができなくなるから、母語ができないから、自分を無意味とか価値がないとか、だめなものだっていうふうに思い込まされていくんですね。それで、子どもは親を馬鹿にし始めます。親は日本語ができないっていうんで。

そうした状況を背景にして、考えたのが今日の授業です。

私の結論はこうです。一人一人の子どもに日本語をどう教えるかっていうスキルは、私はかなり持っています。日本の中でも。でも、大事なことは子どもたちに私が教え込むより、子どもたち自身が持っているものを引き出してあげること。それを、私は今日の授業は対話を中心とした授業です。お互いにこう、言葉の掛け合いをしながら子どもたちの良いものを引き出していく。あなたは素晴らしいんだっていうことをやりたかったんです。それが、今日１番最初に言った自尊の感情ですね。あなたは素晴らしいんだっていう、それを私は心がけました。

あのねらいで授業を作って一生懸命、今日がんばってきたんですけども、みなさんはどうお考えていただいたんでしょうかっていうことを、少し気になるんですが、今日は本当にありがとうございました。」

村上「じゃあ、まず善元先生の授業について感想を言って、それから順番が後先になって申し訳ないんですけれども、Tao 先生と Hoa 先生の授業について意見交流をするという順番でよろしいでしょうか。大丈夫ですか。

それではまず、善元先生がおっしゃっていたことを受けて、ベトナムの先生方の率直なご感想をお願いします、あれば質問も。」

Loan **校長**「まず私が一つ、良いなと思ったのは、導入はすごく身近なことから、すごく

シンプルな簡単なテーマから入って、それからだんだん生徒も意見を言い出すような、児童の意見を引き出すような方向に持っていった点です。

つまり児童が自分から意見が言える、主体的に意見が言えるような方向に授業を導いていったところが素晴らしいなを思いました。

二つ目は、善元先生は全然ベトナム語を知らないにも関わらず、児童たちと先生のいわゆる距離感っていうのが、最初から非常に近かったので、児童側も本来なら非常になんていうかな、言葉がわからない人間だということで警戒をするのが普通ですが、そういったものが全然感じられませんでした。それは、善元先生側のいろいろなスキルですね、工夫があったからだと思います。

最初は生徒もこういう授業を受けるのは初めてなので、多少、ためらいとか驚きとかがあったようですが、やはり、児童が興味を引くような道具とか絵とか、模造紙で書いたようなものとか教具が次々と出てくることによって、どんどん児童が引き込まれていって、最後は本当に先生の意図した「自尊心を持とう」ということについて、100 パーセント理解できたかどうかはわからないけれども、かなりの部分でわかったと私は感じております。

今回の先生の授業の盛り上がりのところはやはり、私たち人間、それはベトナム人、日本人、タイー族に限らず、ルーツをたどっていくとアフリカなんだ、というところだと思いますね。アフリカがルーツで、そこから出発していろんな地域に散らばって、今の自分がいる、または善元という日本人がいるという風に、非常に児童たちの視野が広がりつつ、また、想像力が高まったという風に思います。」

村上「はい。何か質問があれば･･･。ないですか？じゃあ、Tao 先生に。」

（Tao 先生も Hoa 先生もとても恥ずかしがっておられ、なかなか意見を述べられない。隣に座った Loan 校長に向かって意見を述べ、Loan 先生が代弁された。）

那須「今、お二人の先生が、恥ずかしがっておられるんですよね。初めて会う外国人との研究会ということで。

ロアン先生を通して言うんですけれども、自分たちができる授業っていうのはやっぱり、例えば今日 Hoa 先生がやられたのはベトナムの中の南部の文明、文化、地理歴史というふうに、非常に特化した、または限られた分野のことについて 1 時間の授業を打つということは慣れているんです。

ですが、今日見させてもらったように、宇宙から始まって、地球全体から始まって、アフリカまで話が飛んだにも関わらず、最後は一つの結論にこう収斂していくっていう、こういうやり方っていうのはちょっと私たちにはできませんね、と。真似できま

せんね、というところでびっくりしました、と言っております。」

善元「でも、２時間目の先生の授業があったから、私はすごく安心して授業できました。子どもたちのあの理解の深さがあったから、私は安心して授業できました。」

村上「(同じクラスでやった) Hoa 先生のあの地理の授業があったからこそ、善元先生の授業へとつながっていったと思います。」

Loan「そう褒めていただくのはありがたいですが、やはり先生の場合は、最初自分の勤めている小学校の写真から始まって、そこにいる子どもをまず連れてきて、その県はどこにあるか、そこから広がってつなげていく、そういういろんなものをつなげていきながら、実はちゃんと一貫したテーマ性があるという授業、その辺がまだまだ私たちにはできませんね。」

善元「たぶん一言で私の授業を言うと、Hoa 先生が行ったような授業は、私がやってきたような授業なんですね。部分は、パーツは本当にしっかりしてるんです。

私の授業は世界観とか人間観とか、あるいは生命観とかそういうのができるのは、私も実はああいう授業をふだんやってるんですね。だからこそできる。両方必要っていうことをちょっと考えています。」

村上「Hoa 先生のような授業が積み重なってこそ、今日の善元先生の世界観、人間観につながっていくということですね。」

(Hoa 先生の小さな声をひろって)

那須「ちょっとどういうふうに考えたのか。そういうのが理想で、できるとおっしゃったのを聞いて、Hoa 先生としては、そうすると私たちは先生が今回持ってきたような、ああいう写真とか地図とかひょうたんとか、そういった具体物を、私たちはもうちょっと集めて、授業をした方が良いんでしょうかって。」

善元「私は大丈夫ですよ。子どもたちのためになることだったら、何でもします。そのためにどんな教材でも作ります。だから、今回は儀間知子さんが楽器ができる。で、この先生がいろんな歴史を知ってる。で、私は昨日、本屋に行っていろいろ探しました。だから、子どものためだったら何でもします。寝ないで考えます。だから、授業つくるときは、あれがない、これがない、これがない、っていうより、あれがあるじゃないか、これがあるじゃないか、ってそういうのを連結する力、それが授業力だと思います。先生 (Hoa 先生に向かって)、絶対できますよ。」

Loan「先生が自尊心ということを強調されたので申し上げますけれども、先生が今日やられた授業のようなスタイルとは違うかもしれませんが、私の学校ではいろんな少数民族の生徒が来ているので、折に触れてその少数民族の歌を歌ったり、踊りをし

たり、または、各少数民族の祝日、祭礼の日、お祭りの日を利用して、みんなでそのお祭りに民族衣装を着て参加したりとか、そういったことを通じながら、各民族のプライドやアイデンティティーというものを保とうという努力はしております。」

善元「日本はそれがなかなか難しいんですよね。同化しようとしてしまう。いろんな民族がいても、どんどん同化する。だから私がえらいとすれば、私はそれと戦ってますよ。本当に難しいです、日本の場合は。」

Loan「そういう日本の状況というのは、私は初めて聞きました。そういうところは我々の国にはなくて、たとえば、タイー族のお祭りのときにフモン族とかヅァオ族の人も入って、いわゆるコンテストみたいなものを、歌のコンテストみたいなものをして、楽しみながら自分たちの持っている文化を出し合うみたいなことは非常に盛んですね。」

村上「私は国語教育が専門ですけれども、たとえば「国語」という領域で日本の先住民族であるアイヌ語や、あるいは沖縄の言葉についても教えるという規定は公的にはありません。ですから、「アイヌ」が「人間」を表すアイヌ語であることも、子どもたちはみんな知りません。私は Hoa 先生の授業で、こんなに、ベトナム国土に居住するいろんな民族について、教えられていて、しかも子どもたちがよく自分たちで各々の民族の特色について発見して発表している姿にたいへん感銘を受けました。」

Loan「たとえばですね、今呂里さんが言ったように、子どもたちが南部の少数民族のことについて積極的に意見を言ったりするっていうのは、折に触れて、私たちはこういう『54 のベトナム民族』という本を使いながら、今私たちが住んでいるベトナムにはこういう人たちがいて、こういう民族衣装を着てるんだよ、ということを折に触れて話しているから、今日の Hoa 先生の授業をしても、すぐパッと反応しているんですね。」

村上「それは、日本人の私たちにとって非常に学ぶべきところです。すばらしいです。それでは次に 1 時間目の Tao 先生の授業について感想を。」

那須「先生ご自身にどうしてああいう授業をやったかって聞かなくてもいいですか？」

村上「はい。それでは Tao 先生、今日の授業のねらいについてお話しください。」

Tao「クラスの人が全員少数民族ですから、ベトナム語を勉強する際に、耳から入ってくるベトナム語と、目で見るベトナム語と、書くベトナム語がなかなかリンクしていかないんですね。ですから今日の授業では、まず「アッ」という音を私が発音しつつ、黒板でその字を見てもらう。

つぎに、それを実際自分で書けるかどうかっていうのを入れてましたよね。そういう手を使ってさせることによって、上手くリンクさせる、それに主眼を置いたんですね。どうしても少数民族の児童の頭の中では、たとえばタイー族でしたらタイー語でいろいろなことを考えてしまうことと、ベトナム語で考えてしまうことで、分かれてしまうのです。さらにまた、彼らにとっての新しい言語であるベトナム語を聞く、見る、書く、話すで一つの連関を作ることが、まず1年生にとってベトナム語を勉強するときの主眼です。ですから、ああいう方法を取りました。」

Loan「ベトナム語の特徴というものを、文法用語とか発音記号などで教えることは小学校1年生からはできませんので、ああいう形でしつこく、たとえば「オッ」「アッ」とかいうのを今日やっていましたけれども、必ずベトナム語というのは母音の次に子音がくるとか、子音が前に来たら母音がくるという順番があるので、それを徹底的にまず覚えこませます。そうすることによって、自然にタイー族の子どもたちは、理論的には頭では分析できないかもしれないけれども、「あ、自分の母語のタイー語とベトナム語とはこういう部分で音韻が違うんだな」とか「音声的に違うんだな」ということがわかってきます。そうすればしめたもので、そこからベトナム語が急に覚えられるようになるわけです。」

村上「はい。では、私がTao先生の授業の感想を言って、Hoa先生の授業の感想を西岡先生に言ってもらうという形で進めていきたいと思います。」

那須「はい。どうぞ。」

村上「Tao先生、本当にありがとうございました。

先生の授業は、前半で基礎を確実に全員に習得させて、次の段階ではその習得した基礎を応用して、活用していくという二段階で展開されていましたよね。

活用の段階では子どもたちを楽しくゲームに誘い込んだり、積極的に参加させるという工夫が至るところでなされていました。

一つ一つの単語について、ただ書かせるのではなくて、たとえば歌を歌って体でそれをいったん体験させたり、あるいはその語句の絵を見せて—生活に根ざした場面の絵ですね、果実や竹篭の絵を見せながら、そこからいくつも関連する語句をたくさん言わせて、つぎに書かせていきました。一つ一つの言葉を身体を通して、また生活に根ざして、話す→書くという連関で習得させようという工夫をなさっていたところが素晴らしいと思いました。

また、そして、先生がタイー語を要所、要所で使ってらっしゃることで、後ろの方の、たぶん少し学力の遅れた子どもも、ハッと目を輝かせて手を挙げていました。

母語を教授言語として活用されている点が素晴らしいと思いました。

組み立てが素晴らしく、また高度なスキルを駆使した授業であったと思います。」

Tao「先生が今指摘されたとおりの授業をしようと思ったので、そう言っていただければ光栄です。」

村上「先生は何民族ですか？」

Tao「キン族です。」

村上「タイー語はどこで勉強されたんですか？」

Tao「子どもたちから学びました。」

善元「何年くらいで？」

Tao「毎日タイー族の子どもたちと接して、注意深くタイー語を聞いていることで覚えられました。こういうタイー族の生徒と接して、もう８年くらい経っています。」

村上「私は先生がタイー族の先生なのかと思っていました。

じゃあ、次にHoa先生のねらいをお願いします。」

Hoa「私の今日の授業の主眼は、いわゆるメコンデルタ地帯、南部全体ではなく、メコンデルタ地帯に住む少数民族の祭礼、および服装というテーマでやろうと思いました。」

Loan「今、Hoa先生はそう説明されましたが、そのメコンデルタに特化したという言い方はちょっと修正するべきですね。なぜならば今日の授業ではチャム族のことも結構、Hoa先生は言及されていましたので、チャム族はメコンデルタ地帯に住んでいるんではなくて、ベトナムの中南部に住んでいる人たちですから、私が言い直すとすれば、ベトナム南部に住んでいる私たちの兄弟の(直訳すると兄弟となるんですが)、

私たちの兄弟の少数民族の人たちの紹介であったという言い方をしていますね。」

那須「今、Loan先生が聞きたがっていて、昨日呂里先生から頂いた絵はがきをHoa先生が使って、今日その中でハーリー（爬竜舟競漕）の写真を見ましたが、これは日本全体でやっているのか、どこでやっているのか教えてください、と聞くので、沖縄でやっています、というふうに答えました。」

西岡「長崎でもやってますよ。瀬戸内海でも一部やってるよ。ドラゴンボートですね。雨期に入るときにやるんですよ。」

Loan「また、Hoa先生が、昨日私が呂里先生からもらった絵はがきの中でチョイスして着物を出していましたけれども、なんで着物を出したかというと、私が９月に沖縄に訪問したときに首里城で琉装を見せていただきました。そのときパッと思い出

したのが、私たちキン族が使っているアオザイの前の伝統的な衣装のアオトゥタンという四つ身ものの服装があるのですが、それに類似した民族衣装を着ている少数民族がいるのです。それとつなげれば子どもたちが日本との関わりを想像できるかなと思いました。そういう理由で、Hoa 先生は琉装の写真を出しました。」

村上「沖縄の写真を、昨日渡した写真を早速に教材に使っていただいて、とても嬉しかったです。私たちも兄弟として認めてくださった気がしました。」

Loan「それは、兄弟っていう言い方を超えて、いわゆる民族同士の文明が非常に似通っているということだと思いますね。それは、さっきの善元先生の授業のなかで、「人類はどこから来たのか」という地図で呂里先生が説明したように、一つの所から散らばって、それが混じり合ったということにもなるんじゃないでしょうか。」

村上「なるほど。そうですね。じゃあ、西岡先生、お願いします。」

西岡「Hoa 先生の地理の授業を見させていただいて感じたことはですね、私たくさん今まで日本の小学校の先生の研究授業とかに何回か参加していますけれども、非常に新しい手法と言いますか、おもしろい手法を研究されていて、良かったと思います。

ベトナムの中のその地域の違いということに今回の授業のテーマやったと思うんですけれども、その中でやっぱり、今まで話にありましたけれども、校長先生からですね。歌とか踊りとか祭りとか、そういう機会があるごとに異文化の経験を積んでおられることが今回の授業にも活かされているなと思いました。

上手くされていたのは、グループに分けてですね、意見を言わせるというやり方は、非常に良い方法ですので、今後もまた続けていただけたら嬉しいなと思います。そのときにできるだけ発言するのが苦手な子にも、もう少し配慮していただいて、できるだけそういう子どもにも発言の機会を与えてあげるようなグループ学習をぜひやってください。そして、上手くほめてあげてください。ほめてあげることによって、善元先生もそうなさっていましたけれども、ほめてあげることによって、子どもはみんなの前でほめてもらったということが、非常に自信になりますので、ぜひやってください。

先程、村上先生もおっしゃっていましたけれども、すぐ写真も上手に使っておられたし、絵はがきですね、沖縄の着物とかハーリーのレースとか、闘牛の写真ですね。あれも非常に上手に使っていただいて、タイムリーですね。それは、やっぱり大事ですね。私たちが来てるときに使ってもらうということは非常に良かったな、と思います。

こういう異文化理解とか多文化理解でいちばん大事なことは、文化には上下がな

いんだと、上とか下とか、どっちがえらいとかだめだとかね、そういうことがないということのベースに立って、先生方がやっていただけたら、子どもたちもですね、伸び伸びと発言してくると思います。

大きな視点から見たら、善元先生の授業もそうですけど、地球全体から見たら、些細なことなんですね、違いというのはね。それに気づくような工夫をまたやっていただけたらな、と。大きな視点で見てるということが、子どもたちにとっては自信につながるんだということをぜひ、ぜひですね。

私の希望としましては、世界地図とかね、ベトナムの地図とかをぜひ教室に貼っていただいたり、地球儀を置いていただいたりしたら、また子どもたちの視点も広がっていくと思うので、ぜひ、置いてください。」

村上「一つ、善元先生の授業について補足します。

善元先生の授業について、先程ベトナムの先生が「子どもたちと先生の距離が近い」というふうにおっしゃいましたけれども、教室の作り方で、子どもたちが対話しやすい教室づくりをなさいました。それをぜひ今後も参考にしていただけたらと思います。日本の学校では対話型の教室づくりが、取り組まれています。」

善元「それについては考えがあります。私たちは教員になったときに、話すときはその人の顔を見て話せって教えられてきました。顔を見て。ところが今までの授業だと、こう先生がいて、子ども同士だと。子どもが喋るとき、後ろの子どもは全部、その前の子たちのお尻しか見ないんです。だから、まあるくすることによって、子ども同士が見合える。教師対子どもだけじゃなく、子ども同士が見える、そういう工夫を意識的にやってください。」

村上「子ども同士が対面できる教室。」

善元「あと、一つ質問しても良いですか？教えてもらいたいことがあります。都市と農村の格差の問題はあるでしょうか。というのは、先程、少数民族の文化を伝えるってことでは、言葉とか衣装とかとても大事ですよね。私が関心持っていることの一つは、親の仕事をどう伝えるかってことなんですね。そうすると、少数民族の人たちがたとえば農村で、どんどん、どんどん疲弊していくということはないのでしょうか？もし、あるとすればどうやってそこで誇りを持たせるか、っていうことを、大体で良いです、大体で。」

Loan「ここの子どもたちが親の仕事を継ぐかどうかというのは、子どもたちによって違います。それはどういう風にかというと、やはり、勉強ができる子どもはより高い、高度な教育を受けるために、この村を出なければなりません。たとえば、大学まで

行くとなると、ハノイの方まで行きます。しかし、この村からそういう高い教育を受けた子どもたちは今まで見ていると、ずっとその大都市に住み続けるのではなくて、またこの村に戻ってきます。そのために、たとえば、ハノイの大学に行ったとしても、ハノイの大学で農業を勉強して、そして戻ってきてここで農業に従事するとか、または、教育大学に行って教育のスキルを身につけて、この地域に戻ってきて教員になるとか、そういう形になっています。」

善元「すごいね～。」

西岡「素晴らしいね、それね。」

～拍手～

善元「それは少数民族についても自信を持たせる教育をやっているからですね。」

西岡「そうそう。それはやっぱり自信が持てるからですよ。」

善元「もうどんどん進んでるじゃないですか。」

西岡「やっぱりアイデンティティーが持てるからですね。ふるさと愛みたいな。」

Loan「たとえば、タイグェン。私のホテルがあるタイグェン市には、タイグェン農業大学とか、タイグェン師範大学がありますね。だからここの村で勉強して、とてもよく勉強ができる子はタイグェンのたとえば、農業大学に行って農業の技術を身につけて、またここに戻ってくる、そういうパターンが多いですね。」

西岡「もう一つだけいいですか。Hoa 先生にもう一つだけ言っときたかったのは、社会の教師、歴史とか地理とかの教師は、教科書を教えるということも大事ですけれども、教科書を使うだけと違って、教科書で、教科書は一つの手段であって、他のいろんな先生が使っているものを、たくさん使ってもらうというやり方をですね、ぜひね。教科書を広げていってもらうということをぜひ。」

那須「具体的にどう広げますか。」

西岡「教科書の内容だけに限定されずに、ふくらませていってもらうようなものをたくさん使ってほしいと。今日のようなですね、いろんなものを、教科書以外のものをですね。それだけです。読んで終わりというのではなくてね。」

村上「じゃあ、副校長先生にも一言、全体を通しての感想を。」

副校長「私が一つ言わせてもらうと、西岡先生や善元先生の授業を見させてもらうと、これは西岡先生がたった一人で授業をやっているんではない、善元先生がたった一人で授業をやっているんではない、いろんな人が関わりながら、またはいろんなものを利用しながらやっているというのを、強く印象を受けました。それにひきかえ、今日のお二方は違うんですけど、端的にベトナムの先生は自分一人で全部仕切って、個々で

奮闘して45分をやるという、そういうことが浮き彫りになった気がします。」

村上「なるほど。それでは、ニュン先生からも一言。」

Nhung「まず、私が善元先生の授業を見て一つ感じたのは、私たちは太陽の子どもだ、というテーマを掲げたことが、こういう少数民族の地域においては、意味がとても深いと思います。というのは、世界中の先住民族、ネイティブの人、少数民族の人たちというのは、太陽を信仰したり、太陽を父親だと思ったりしている場合が多いし、ここに住んでいる人たちもあからさまに「太陽は私たちの父だ」とは言わないまでも、太陽を非常に大切に崇め奉る習慣があります.

いわゆるタイー族にしてもキン族にしても、フモン族にしてもお父さんは同じ太陽なのだと、そしてその太陽の下の一つ屋根の下に自分たちは住んでいるんだと、いうような印象を子どもたちが持ったんじゃないかと、いう意味で今回のテーマは非常に深かったんじゃないかと思います。

私が何でそういうふうに感じたかというと、二つの点からです。

つまり、言ってみれば、縦糸と横糸で「私たちは太陽の子ども」だということを、子どもたちに知ってもらいたいという意図が善元先生にあったのではないかと私は今、分析しています。

縦糸というのは、時系列的にそれをはかろうとしたことですね。つまり、あの世界地図を使って、ベトナムの人、日本の人がこう元をたどっていくと、10 万年前にはアフリカにたどりつくと。そこから、たとえば5万年前にはベトナムに行き、さらに数万年経って、南アメリカ大陸に行くという、そういった縦糸を使いながら、それを説明したというのが一つですね。

横糸で説明したというのは、「じゃあ、今度お隣の人の顔を見てごらん。ちょっと違うけども、似てるところがあるでしょ」ということで確認させたということで、2次元的に「私たちは太陽の子ども」だということを証明したんだと思います。

あと、やはり実物を多用しているということについても、単に物を多用しているのではなくて、直訳すると、その物の見せ方、物の処理の仕方（直訳しているんですけれども)、それが生徒たちを惹きつけるような処理の仕方をしてましたね。

たとえば一つのものを見せるにしても、すぐ「はい、ひょうたんです」ではなくて、「ここに何があるのかな」と想像させながら、少し出して、想像力をかきたてて、「さらにその先には何があるのかな」というふうに、どんどん、どんどん子どもたちの興味を引くようなやり方っていうのが、勉強になっていますね。

先生が先程、対話型の授業というのを今回、大切にしたんだとおっしゃいましたけ

れども、それを私なりに分析してみると三つの大切な要素があったと思います。

一つは、先程呂里先生からお話がありましたけれども、その机、椅子の並べ方ですね。あれは非常に私にとっては斬新でしたね。つまり、話しやすい、対話しやすい教室づくりというものを心がけていた、というのが一つ目ですね。

そして、二つ目はその一つ目の並べ方の功を奏していることもあるんですが、教室の中での主人公が先生ではなくて、むしろ、全員が主人公。先生も主人公なんだけれども、あなたも主人公、私も、その人も主人公、つまり全員が参加して一人一人が主人公だという、そういう雰囲気ができていたこと、というのが、また一つとても大切なことだと思います。

三つ目は直訳するとベトナム語で「同感」という言葉を使うんですが、「同感」っていうのは同じに感じるということなんです。どういうことかというと、先生がある子どもに向かって、その子の名前で呼びかけましたね。これは子どもにとっては、非常に「同感」なんです。（直訳ですよ。）先生と自分が同じ感じで、フィーリングで通じ合っているんだということを感じさせたわけです。先生が子どものことを名前で呼ぶ、または、先生が授業の前にそうやって子どもの名前を覚えてくれてたと、覚える努力をしてくれてたと、いうことは、すごくあの子にとっては「同感」の感情が湧き上がってくる、これがいわゆる対話型の授業の三つ目の大切な部分だと私は思います。

さらに私が大切だなと思ったのは、いわゆる子どもの主体性を重んじて、子どもが積極的に授業に臨み、そして想像力を豊かに発揮させる、そういった時間づくりに心砕いてたということですね。その内の一つは非常に子どもには身近な、そしてわかりやすい例をポッと問題提起を出させて、考えさせてた。たとえば「人と猿はどう違いますか」っていう発問をされたとき、我々大人では考えつかないような答えを子どもたちがしてて、むしろ私たちの方がなんと子どもの知恵っていうのは豊かなのかな、と逆に感服したくらいです。これは一つはさっき言った、子どもの想像力が十二分に発揮されているからだったんだと思います。

その後隣同士見合わせて、「どこが違うか考えてごらん」というふうに話し合いをさせましたね。話し合いというスキルは我々も使っていますけれども、さっきのそういう簡単な、身近な発問をされて、想像力を十二分に発揮させた後、討論に持っていくという形にすることによって、より深い話し合いができたんだと思います。

次に私がぜひ取り入れるべきだなと思ったのはですね、先生が子どもたちに質問して答えたことに対して、それが正しかろうが正しくなかろうが、まずはほめてました。

ずっとほめていました。そうすることによって子どもたちは、「学校に行きたくないな。」という気持ちは全然湧かないでしょう。やっぱり「もっとあの教室行きたいな、授業受けたいな」という気持ちになると思います。

正直言って、この学校はそうでもないですが、学校で先生に怒られてつまらないな、ということで退学していく子が多いのが現実です。しかし、正しかろうが正しくなかろうが、ほめてほめてほめまくる、というのが、とても効果的だなと思いました。

善元先生は先生ではなくて、むしろ俳優なんだよと。それはどういう意味かっていうと、いわゆるこの教壇に立って黒板にこう指しているだけではなくて、手とか足とかまたはお腹とか、そういうもの全てを使って表現をして、また、子どもも前に出して、子どものすね毛を見せたりとか、または通訳の那須に対しても全ての身体を使ってみせるとか、いわゆる直立不動の教師ではない、と。これは全然ベトナムの教師には真似できない点で、これはぜひ、これから真似てもらいたいなと。

つまり、そのあらゆるパーツを使って子どもたちに向かい合うという、そういう俳優的な（直訳ですよ）、俳優的な要素というものは我々は見習わなければならないと思います。

以上述べましたように、子どもたちの関心を引くためのそういう授業づくりという意味は、今回私どもは大変勉強になりました。」

善元「今日、私が準備してね、使ってないものがあるんですよ。それはね、「ヒトと動物の違い」について、人間がね、死んだ人に対する意識なんですよ。死者に対する埋葬の意識。これ、子どもから出てくるときあるんですよ。あと、絵を描く、芸術の意識。まあ、それからあの巨大な建設物ですよね。私は子どもから出てきたときにこれを出すんですよ。出なかったら絶対出さない。教材は全部この中に入ってるんですよ。」

Nhung「西岡先生の授業について、私が思ったことの一つはですね、昨日の先生の授業は単に地図教育、地理教育にとどまってはいないと思います。つまり、立体、３次元のものを１次元に落とし込む、といった思考の練習だと思います。

普通、子どもたちは日常生活の中で、３次元のものをだくさん見ています。円錐形、円柱形、立方体、見てますがそれを実際に自分のノートに書くとき、１次元の世界に落とし込むときどうするのか、という実体験というのは、その日常生活の中にはない。それを、あの時間になさったということは、非常に身近なもののことから非常に高次元な思考展開に段階的に持っていった、そういうやり方だと思います。 実際子どもたちにそういうふうにやらせてみて、たとえば先生がみ

かんをむいて見せたりとかした後、その後ペーパーを配られましたね。それによって、子どもたちはもう一度それのやり方、またはその３次元のものから１次元に落とし込むことの過程をもう一度、再確認できたと思います。

また、地理教育ということで地図を中心に授業を進めるのではなくて、風船形の地球儀を使ったり、またはみかんをむくことで、このむきかたの、船型のものがメルカトル図法につながるというふうに、子どもたちが身近に使っているおもちゃやくだものから、実は地図にこう移行するという、そういう手法は小学校中学年においては非常に良い方法だと思います。

また、西岡先生も善元先生と同様に直立不動の授業をするんではなくて、体を動かしながらなされてたというのは子どもたちにとって大変わかりやすいと思います。」

西岡「ありがとうございました。」

Nhung「アリガトウ(日本語で)。」

村上「それでは、長時間ありがとうございました。

昨日の西岡先生の授業と、そして今日の三つの授業を通して、お互いの文化がつながりあっていること、そして文化のそれぞれの違いを尊重しつつも、みんなが Tre Con cua Mat Troi〈太陽の子〉であるっていうことを感じることができました。子どもたちの自尊心を大切に育む授業づくりをこれからもお互い共同で研究していきましょう。できれば、来年も共同で授業研究会を持ちたいと考えていますが、どうでしょうか？」

Loan「いいですよ。ぜひぜひ、それはやりたいですね。琉球大学のみならず、こういった Nhung 先生のようなタイグェン師範大学等も含めて、やりたいですね。」

村上「それでは、今日のお互いの学び合いについてみんなで拍手をして終わりましょう。」

～拍手～

研究授業「世界の食べもの」の実施と考察

ーベトナム・クックドン小学校2年生での体験からー

西岡尚也

Ⅰ　研究授業の概要

(1)，研究授業実施日：　2010年９月８日（水）

(2)，実施場所：ベトナム、タイグエン省ボーニャイ郡、
クックドン小学校２年生クラス、(17人：男７・女10)

(3)，テーマ：「世界の食べも」を通して考える多文化理解・異文化理解教育

Ⅱ　指導案

１，単元「世界の食べもの」の設定理由

ベトナム北部山岳地帯に位置するタイグエン省ボーニャイ郡は、少数民族の割合が多い地域である。 クックドン小学校区には３民族、キン族（いわゆるベトナム人)、フモン族、タイー族が居住し、全校児童・教員はこの３民族で構成されている。

クックドン小学校でも、教室に常時掲示されている少数民族の写真（写真１，２）が、日常の授業で用いられ、意識的に「多文化共生」の教育が実施されている。ここには、独立以来ホーチミンの少数民族への優遇政策が生きていると考えられる（写真３)。

写真１：教室掲示の民族写真

写真２：教室掲示の民族写真

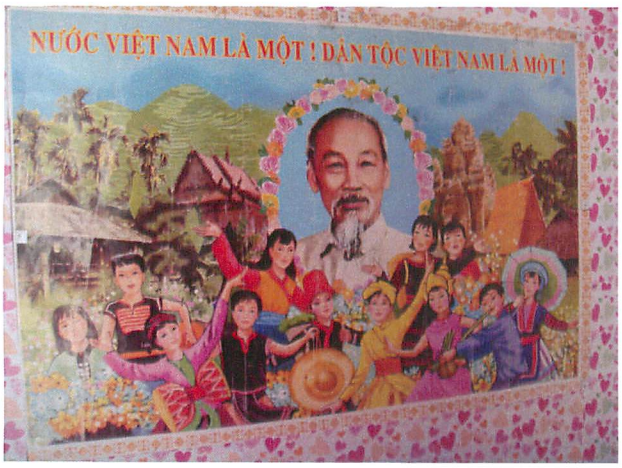


写真３：ホーチミンを囲む 12 人の民族衣装の子どもたちのポスター。

日常から教材として使用されているらしく、複数の教室で見かけられた。

背景には４種類の伝統的家屋と、ミーソン遺跡（チャンパ王国の聖地）が描かれている。そのバックには山頂まで耕作された棚田の風景になっている。

今回の授業では、このような自国＝ベトナム54民族の学習と並行させて、写真教材「世界の食卓」[1)]を用いながら、「国境を越えた多文化理解」への入り口の授業を試みた。

2，単元への児童観

ここでは、小学校２年生を対象にしている。彼らはこれまで「ベトナムの 54 民族」についての学習は、ある程度受けてきているし、自分たちの校区を例として、ベトナム国内での「多文化理解」への基本的な認識は習得できている。今回は「食べもの」という最も身近なテーマから出発し「国境を越えた多文化理解」へと、子どもたちの世界観＝地理認識を拡大するきっかけとなる授業を、実験的に試みた。

3，授業展開

時間	主な活動	教師の支援
導入 ５分	黒板の「掛け地図」で、代表１人に日本とベトナムの位置を確認させる。全員に配布したプリント（白地図）に、ベトナムに着色させる。	代表１人を選び、位置を聞く。 机間をまわり、一人ずつの着色を確認。 （うまく褒めながら雰囲気を和ませる。）
展開 25 分	①「世界の食卓」から、アメリカ・モンゴル・マリ・フランス・ブータンの５か国の写真を各グループ（４班）に配布。 ②５か国以外の「世界の食卓」の写真をスクリーンに写しながら見せていく。 ③ ベトナム少数民族の写真を、スクリーンでみせる。その際クックドン小学校と周辺の写真、地元料理写真も混ぜておく。似ている点・違う点をあげさせる。 ↓ （世界の中のベトナムを認識させる。）	①５か国について、白地図（世界地図）の番号と対比しながら位置を確認する（写真８）。②世界の人がどんなものを食べているのか。ベトナムと同じものはないか？。 ③子どもたちが、自分たちが村の写真や、日常馴染みのある料理写真に反応するように説明を加える。その際ベトナム料理を褒めながら展開する。 ↓ （郷土文化への誇りを意識させる。）
作業 15 分	自宅での食事のようす（料理）の絵を描く（クレヨンと色画用紙を配布、白色画用紙ではなく色画用紙にする。）	机間をまわりながら、自由に描くように指示、早く描けた者を褒める。 （全ての子どもに声をかける。）
まとめ ５分	グループごとに前に出て、各自の描いた絵について説明・発表してもらう。	細かなものの描写にまで注目し、うまく質問し褒めながら、声をかけていく。

Ⅲ，考察と課題

1，今回の授業でめざしたこと

ベトナムは多民族国家であり、54 の民族から成り立っている。したがって国家の政策もあり伝統的に「多民族教育」「異文化理解教育」が盛んである。例えばハノイ「民族博物館」（写真４）には国家をあげた全 54 民族の展示がある。また、少数民族の多い北ベトナム山岳地帯のタイグエン市、南ベトナム山岳地帯のダラット市にも「民族博物館」（写真５，６）がある。いずれも民族の分布図や模型、生活用具や衣装・風俗・祭礼などが、公平・平等な視点から詳細に紹介されている。ビデオ映像を用いた視覚的に工夫された優れた展示である。

写真４：ハノイの民族学博物館

写真５：タイグエン市の民族学博物館

写真６：ダラット市の民族学博物館

しかしながら地方に住む小学生が、このような博物館を訪れる機会は少ない。

したがって、日常の授業では教室のポスターや、少数民族写真集などを用いた授業が展開されている。今回はそれに加えて、「世界の食卓」写真、授業者の撮った写真を中心に、小学校周辺・郷土料理などを、スクリーン映像で見せることで、子どもたちの世界観＝世界認識を拡大し、国境を越えた「多文化理解」「異文化理解」への入り口を体験してもらうことを、目標とした（写真７）。その際、単に教材写真集「世界の食卓」や、少数民族の写真を見せるだけではなく、クックドン小学校周辺の写真、郷土料理などのより「身近な日常の写真」を意図的に混ぜておくことで、子どもたちの興味・関心を引きつける工夫をした。

写真７：写真と映像を使った授業

この背景には自分たちの生活する地域　における違い（民族間の言葉や習慣、衣食住・伝統行事における格差）は、実は世界的にみた広い視点での「差異」と同じ意味で理解してもらいたいからである。

写真８：白地図で位置の確認

写真９：自分の家の食卓を描く①

写真 10：自分の家の食卓を描く②

写真 11：自分の家の食卓を描く③

そして、このような「身近な日常の違い」を、世界的に拡大したな視点に立って、「寛容な態度＝偏見や差別を抱くことなく受け入れる」ことが重要であると理解してほしい。このことが今回の授業単元設定の目標である。

また、映像を見た後で、各自の家庭における「食卓のようす（ハレの日の食事）」を絵に描いてもらうことで、自分たちの郷土料理（食文化）に誇りを持ってもらうことを考えた（写真９～ 11）。そして最後に前に出て各自の作品を説明・発表してもらう時間を設けた。この発表（うまく褒めてあげる）によって「自信」を付けてもらいたいと考えたからである（写真 14）。

２，授業をふり返っての考察

まず日本から来たわれわれが、授業をしたことに「異文化理解」の視点で、意義があるといえるだろう。私たち自身が「教材」である。次に「映像を使った」ことで、子どもたちの関心・興味を惹くことができた。特に自分たちの身近な学校や周辺地域、日常の郷土料理の写真をを、意図的に混ぜながら見せたのが良かったと思う（反応があった）。

また、「まとめ」として子供たち自身の家庭での「食卓」の絵を描いてもらうことで、「世界の食卓」との結びつきを認識することができた。（写真 10 ～ 11、写真 12 ～ 13）。

最後に「特別（ハレ）の日の食事」をテーマとして、「ごちそう」の絵を描いてもらうように指示した。しかし、時間的な制約があり、最後まで完成できなかったケースも多かった。

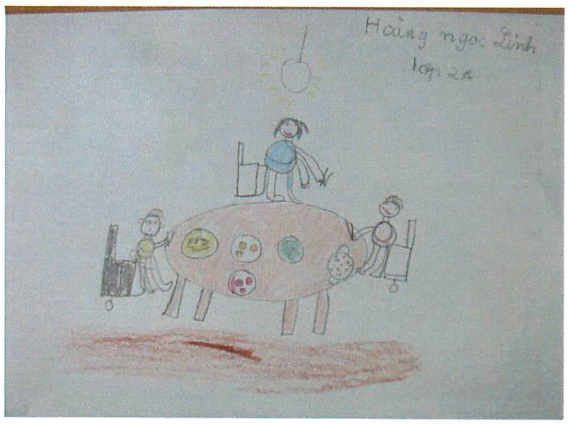


写真 12 ～ 13：子どもたちに描いてもらった「私の家の食卓」

写真 14：グループごとの作品（絵）の説明発表

3．反省点と今後の課題

将来再訪のチャンスがあれば、同じクラスでもう少し時間をかけた授業をしてみたい。また時間不足への対策として、通訳してもらう時間に十分な余裕を持って授業を展開する必要がある。授業終了後子どもたちの感想を文章で書いてもらえれば、貴重なデータになると考えている。

注：

1）開発教育協会編（2010）『写真で学ぼう！ 世界の食卓・学習プラン 10』（特活）開発教育協会発行の付属写真を使用した。

謝辞：今回の研究授業の実施に際しクックドン小学校の先生方には、教室の設営準備などで大変お世話になりました。ありがとうございました。

単元・太陽と山に住む人たち(2)

クックドゥオン小学校第４学年年学習指導案（２）

授業日　2010年9月8日

指導者　善元 幸夫

研究テーマ

多文化共生を生きる価値観の形成を築く教育を求める

――マイノリテイの自尊感情の形成のために――

1　なぜ「太陽と山に住む人たち」の授業をおこなうのか

1）子どもたちが、自らの生活を自分自身で「自分たちの文化・生活」を意識し、村の生活をもう一度見出すことにより、自分たちの未来の生き方の可能性をひろげ、「自尊の感情」の形成を培っていきたい。

2）地球を「宇宙船地球号」として，一つの星と考え、国境を越えて「沖縄とベトナム」をつなげ、現代を生きるクックドゥオンの子どもと、沖縄との対話を試みたい。

＊前回は人類の移動に注目したが、今回は両地域の労働・食文化から考える。

3）人類はアフリカから東方に移動したのに対し、中国で生まれた茶・茶の文化について注目してみる。茶は中国から日本そして西方に広がっていった。クウードアン小学校の付近は茶の名産地である。子どもたちの地域・山村について愛着を持ち、子どもたちが地域で生きるアイデンティティ形成と重ねて考えて生きたい。

2．単元名・単元の構成

1）単元名「太陽と山に住む人たち」（１時間）ベトナム語通訳・那須 泉

2）単元の構成

・私たち人類はアフリカから始まった。

・およそ３万年ぐらい前に来たベトナムの一対はその後さまざまなるーとでベトナムに来た。現在その民族の数は５４になる。

世界中におよび東アジアは緑茶の文化圏を持つまでになった。

・沖縄は西方からの人類の移動で特に南方からの移動、沖縄人を形成した。沖縄についてもっと知り、共通の食文化、お茶を体験しよう。

＊一見、子どもにとって不利益なことが、つまらないと思われていることが、子どもの生きる上で重要であることに気がつく。

3　児童・地域の実態

Cuc Duong 小学校（ハノイ北西９０キロ　都市タイグエンから２時間の山村）

4．授業の展開　　総合学習

授業のポイント１

・人間と太陽の歴史・今あなたはどこにいるのか！

・私たちはどこから来たのか

授業のポイント２

・村の生活・親の仕事・そして命にふれる。

①　親は林業、米つくり、お茶などの仕事にどんなことに工夫をしているかを考え、そのことを文章化してみる。

②「お茶の利き味」を行い日本とベトナムがつながっていることを知る。

授業のポイント３

・子どもたちの感じたこと考えたことを文字に置き換えてみる（感覚の文字言語化）

授業のポイント４

・　沖縄について沖縄の人の仕事を紹介し、沖縄人がどこから来たのか考える。

		主な活動	教師の支援	評価
7分		1前回の授業のまとめ ・私たちは日本から来ました ・私たちは沖縄から来ました ・わしたち人はどこで生まれた？ 地球の初めは人はいなかった！ ・ベトナム人はどこから来た？	・世界地図１の提示（アフリカから移動） 沖縄の写真１（海の風景） ・（前回のひょうたんの子ども） ・民族の移動（写真０） ・ベトナムの２地域からの移動を確認 （地図にベトナムの北方・南方記入） 中央アジアから東南アジアへ（地図記入） ・ベトナムの５４の少数民族 「モン族はどこから来たのか？ タイ族はどこから来たのか？」	
１０		1人間と動物のちがいを話したよ！ 先生がまとめるよ！ 「何をしているの？労働！」 （子どもの反応） 2　人間は労働をする（人間とは何か） 人間は協同で労働をする 「これはなんだろう？」	「・・・さん、おぼえている？」 労働する人間の絵（フランスの博物館） 写真１火を使った 写真２夜も怖くない 写真３言葉を話す 写真４死んだ人も埋めた！ 応用問題 写真５・写真６ 協同で、言葉と道具を使い労働する	写真 写真
8		1　人間の生活を楽しくするために、仲間を作る　仲間がいると楽しい！ ・その仲間と生きるために労働する ・Cuc Duong の人ははどんな仕事をしているのかな？ 「誰か教えて！　何をしているの？」	写真７木を切る 写真８竹を切る 写真９写真１０米を作る	

5		（こどもたちの発言） ２では家でお父さん、お母さん何してる？ 「作文にしてみよう」	＊みんなの親が作った米がアジアの人が食べているよ（貿易４位・資料） 写真１１米の輸出 写真１２お茶を作る	
１５		１今日はお茶の話しをしよう 「これからお茶宛クイズをやるよ」 「この中で家でお茶を作っている人？」 「・・さん、教えてください」 「今日は先生はみんなにいい物を持ってきたよ、なんだろう？」 「この中にお茶があります。どこのお茶？」 （ニオイ　味、、） 「それではこの３つのポットの中にタイグエンのおｔ種	６グループにお茶の袋を配る Ａ・Ｂ・Ｃのお茶を飲む タイグエンのお茶を探す （黒板に名前を入れる） イギリス　日本　ベトナム ・お茶のワンポイントレクチュアー （紅茶とお茶） 世界地図２の提示	
5		「日本とベトナムのお茶は同じだね」 １沖縄人はどこから来たのだろうか？ 「では昔の沖縄人の写真を見せます。」 「今度はいまの沖縄人だよ。沖縄人はどこから来たと思いますか？」 「これで先生の授業は終わります」	写真１３　１８０００年前の湊川人の顔 ・現在の沖縄の老若男女の顔 ・海・山の仕事の写真 写真１４　現在の沖縄人の顔 （地図に北・西・南からの移動を記入） ＊弥生人・縄文人・沖縄人	

授業記録・「太陽と山に住むたち(2)」

授業者　善元幸夫・通訳　那須 泉

善元　「こんにちは。」

C　「こんにちは。(日本語で返す)」

善元　「うまい、うまい。もう一回。こんにちは。」

C　「こんにちは。(日本語)」

善元　「こんにちは。」

C　「(何名か吹きだす)。」

善元　「(一つのグループを指して) こんにちは。」

C　「(子どもたち、口々に) こんにちは。」

善元　「(別のグループを指して) こんにちは。」

C　「こんにちは。」

善元　「みんなで。」

C　「こんにちは。」

善元　「シンチャオ (Xin Chao：ベトナム語でこんにちは)。」

C　「シンチャオ。」

善元　「私の顔、わかりますか？」

C　「はい。覚えてますよ。」

善元　「日本から来ました。地図出してください。日本どこ？ (男の子当てて) どうぞ。
日本どこ？日本どこかな。」

C　「(前に出た少年、地図上の日本を指さす) これです。」

～拍手～

善元　「ありがとう。日本ここね。いい？日本のおーきーなーわ (ゆっくり発音)
おーきーなーわ。」

C　「(善本先生と一緒に) おーきーなーわ。」

C　「(それぞれ口々に) おきなわ…おきなわ…」

善元　「ここ！ (おきなわ) から来ました。沖縄。(写真集を出す) いいね。沖縄。
沖縄はね、海がいっぱいありますよ。」

C　「(写真を見て、それぞれに) うわーっ。」

善元　「うわーっ。沖縄から来ました。沖縄、海がいっぱいありますよ。」

C　「(子どもたち、写真を興味深く眺める)」

善元　「はい。もう一枚。沖縄、海がいっぱいありますよ。はい。沖縄は海がいっぱいあります。はい。去年、人間と動物の違い勉強しました。覚えてるかな。クェンさんどこにいる？クウェンさん？」

クェン「(すっと立ち上がる)」

善元　「あっいた！クェンさん。去年、人間と動物の違い覚えてるかな？どうぞ。(前に呼ぶ)」

クェン「(前に出る)」

善元　「人間と動物の違い、教えてやってください。一つでいいよ。」

クェン「一つは、人間は言葉を知ってるけれども、動物は言葉を知りません。」

善元　「はい。拍手！」

～拍手～

善元　「すごいね。ありがとう。この中で人間はどこから来たか覚えている人いますか？人間はどこから来た？これ見ていいよ。これ見ていいよ。どこから来たかな？人間は？おっ待って待って待って。むかーし、むかーしは人間いたいないどっち？むかーし人間いた？」

C　「(どう答えたらよいか困っている様子)」

善元　「はい、じゃあ、あなたが、この人（後ろの子ども）に教えてくださいって。この人、手挙げてたよ。はい。ありがとう。」

C　「海の方から人間は来ました。」

善元　「そうですね。一番最初の人間は、一番最初の人間は、ここです。(地図上のアフリカを指す）ここどこ？」

C　「アフリカです。」

善元　「おお、すごいねぇ。」

～拍手～

善元　「今から、20 万年前、アフリカで人間は生まれました。そしてね、アフリカからこっちに行きました。ここどこですか？どこかなここ？イギリス、フランス、ドイツ、はい、いいよ。ここに来ました。じゃあね、ベトナムの国どこ？ベトナムどこ？」

那須　「わかりました（子どもが）手挙げてます。先生。」

善元　「はい、どうぞ。お名前は？」

C　「ソンです。」

善元　「ベトナムどこ？」

C　「ここです（地図を指す)。」

善元　「おお！」

～拍手～

善元　「じゃあね、ここから 20 万年に来ました。ベトナムはどこから来たでしょう。ベトナム人は？じゃあ聞くよ。」

那須　「(子どもが手を挙げている）わかりました。」

善元　「おお！どっから来たの？」

C　「やっぱり同じようにアフリカから来たと思います。」

善元　「なるほどな。じゃあ、みんなに聞くよ。ベトナムはいくつの民族？昨日勉強したよ。昨日勉強したよ。だめだめまだまだ。昨日勉強したよ。ベトナムはいくつの民族？みんなでいくつ？みんなで、みんなで。」

C　「54 民族です。」

善元　「そうですか？そうですか？」

C　「はい。あってます。」

善元　「ベトナムここだね。54 の民族が、こっちから来たのかな？こっちから来たのかな？これわかる？」

C　「アフリカから来ました。」

善元　「(地図に）でかく描いていいよ。はい。じゃあ、拍手。」

～拍手～

善元　「先生はみなさんと分かれてから 1 年間、一生懸命ベトナムのことを勉強してきました。ベトナムはですね、ここから、こう来て、こうやって来た人たちがいます。それからベトナムは、こう来て、こう来た人たちもいます。じゃあ、クモンの子どこからきたと思いますか？ 1 番ですか？ 2 番ですか？はい、1 番だと思う人？1 番！ 1 番！ 2 番？」

―子どもたち、挙手

善元　「はい。はいどうぞ。」

C　「中国です。1 番です。」

善元　「1 番？当たりー！じゃあ、タイイ族は？タイイ族？」

C　「中国。」

善元　「はい、こっちから来ましたね。だからベトナムには、まだこちらから来た人全部で 54 ですよ。はい。一番最初の人達は、アフリカの人達は、こんな人達でした。」

―写真を提示

善元　「それで、さっき人間と動物の違いを話してくれましたね。はいじゃ、先生が話します。人間は火を使います。動物はできません。そうですか？そうですか？」

―子どもたち、口ぐちに「そうです。」と答える

善元　「人間は火を使うから夜が怖くない。そうですか？みんな夜怖い？」

C　「怖くない。」

善元　「人間は、これを見てください。言葉を話します。人間は何ですかこれ？これわかる？誰かわかる？何だろう？1分間話してくれる？この絵は何でしょう。話してください。話してください。見に来ていいよ。」

―子どもたち、黒板に掲示された絵を見に行ったり、グループで話す。

善元　「はい、分かった人？いい？1番、2番、3番。はい、1番どうぞ。」

C　「これは、亡くなった人を埋めているんじゃないかと思います。」

善元　「なるほど。2番。」

C　「亡くなった人を運んできて埋める場所に入れてます。」

善元　「なるほど。同じだね。同じだね。」

C　「亡くなった人を、これからここに入れて火葬を始めます。」

善元　「ああ。さあ、みなさんの家に犬がいますか？」

C　「います。」

善元　「みなさんの家の犬が死んだ時に、お母さん犬がこうやってあげますか？」

C　「いや、しません。」

善元　「魚が死んだら、魚のお母さん魚が子どもにこうやってやりますか？」

C　「ちがう！」

善元　「はい、これが人間と動物の違いです。」

C　「そうです。」

善元　「人間は言葉ができるから、こういうことができます。これ何でしょう。この人とこの人、何の話をしてるんでしょう。」

C　「わかりました。」

善元　「考えて、考えて。自分で考えて。自分で。自分で考えて。自分で。」

C　「わかりました。」

善元　「はい。」

C　「おもちゃを使って、言葉を使いながらおもちゃを使って遊んでいます。」

善元　「はい。残念でした。これはね、動物の足跡です。」

那須　「まだ、手を挙げてます。」

善元　「じゃあ、クェンさんやってください。私クウェンさん大好きです。」

クェン　「これは、人間が動物の足跡を見ています。」

善元　「そう。当たり。じゃあ聞くよ。この動物をこの二人は食べたいです。動物どっち行ったでしょう。こっちでしょうか。こっちでしょうか。こっちかな？こっちかな？」

C　「こっちに行きました。」

善元　「そうねえ。こっちへ行ったら食べられないね。こっちへ行ったら食べられるね。はい、こういうことを仕事と言います。
みなさんのお父さん、お母さんのお仕事は何ですか？」

C　「農業してます。」

善元　「はい。それからどんな仕事してる？みんなのお父さんお母さん、どんな仕事してる？」

C　「私のお父さんとお母さんは一緒になってお茶の仕事をしています。」

善元　「お茶？ありがとう。（別の子に）どんな仕事してる？」

C　「お父さんとお母さんは稲作業しています。」

善元　「はい。稲作業、でてきたね。はい、最後に、どんな仕事してる？」

C　「森の中で仕事しています。」

善元　「（写真を提示しながら）こんな仕事かな？こんな仕事ですか？こんな仕事してる人？いますか？」

―子ども、挙手

善元　「おお。じゃあ、こんな仕事している人いますか？いますか？いなかった。こん仕事してる人いますか？」

―子ども、挙手

善元　「おお。これ何？」

C　「稲作です。」

善元　「はい、稲作だね。はい、ベトナムの米はとても有名です。これ何ですか？」

C　「収穫が終わった後は…です（以降聞き取りにくい）。」

善元　「このあと、この米どこいくんでしょう。」

C　「輸出します。」

善元　「そう。ベトナムはね世界でも４番目に世界の中の４番目に他の国に、お米売ってます。だから皆さんのお父さんとお母さんが米を作ってないと、世界の人、米を食えません。日本もベトナムから米を少し買ってます。ありがとうござい

ます。ありがとうございます。ありがとうございます。ではですね、これからみなさんに、お父さん、お母さんがどんなお仕事をしているか、その様子について、またそのお仕事について、みなさんが感じていることを書いてもらいます。」

―子どもたち、それぞれに紙に書き込んでいる。

善元　「はい。すみません。後で書いてもらいます。誰かにやってもらいます。どの人にやってもらうかなあ。この人ですよ！読んでください。もう一人はこの人になりますよ！（♪誰にしようかな…で決めていく）はいどうぞ。二人前来てください。どうぞ。みなさん聞いてください。一生懸命書きました。一生懸命聞きましょう。はい。」

C　「(話し始めるが聞き取りにくい)」

善元　「聞こえません。聞こえません。先生ここ。」

C　「私のお父さん、お母さんは、水田で働いています。すごく一生懸命毎日働いているので、楽しそうです。でも、忙しい時期になるとお家に帰れないことがあるので、稲の世話のためにお家に帰れないときがあるので、その時期は大変だと思います。」

善元　「はい、ありがとう。」

C　「ズォン」

善元　「ズォンさん、お願いします。」

C　「お父さんとお母さんは水田で仕事をしています。私のお父さんとお母さんは朝

C　早く水田に行ってしまい、夕方遅くまで毎日ずっと稲の世話をしています。なぜそんなに、お父さんお母さんが朝から夕方まで水田に行くかというと、できるだけ自分たちが育てた米のレベルが良い品質のものを作ろうと思っているからだと思います。」

～拍手～

善元　「ありがとう。」

―善元先生、袋からお茶の葉をゆっくり、取り出す。

C　「タイグェンのお茶だ。」

善元　「ハノイで、一番おいしいお茶をくださいと言ったら、このお茶をくれました。みなさんタイグェンのお茶好き？」

C　「好きです。」

善元　「これからみなさんとお茶当てクイズをやります。ここに３つのお茶があります。

1番、タイグウェンのお茶。2番、日本のお茶。3番…。これじゃないね（世界地図を指し）、これじゃないね。先生はもう一枚用意したよ（別の世界地図を取り出す）。ほうら、先生はもう一枚用意したよ。ほら。いい、いい、いい？だれか説明できる人。お茶はどこから来た？」

C　「お茶は中国から来ました。」

善元　「ああ、そう。いいですか皆さんね、人間は・・・ようく見てて、ようく見てて、ようく見てて、ようく見てて、ようく見てて、見てて。人間はこっちから来ました。お茶はこっちから来ました。こうやって行きました。そして、日本のお茶、タイグウェンのお茶、ここのイギリスのお茶。皆さんでわかるかな。その前に、先生は皆さんに助けを出します。まず匂いを嗅いでみてください。その次、食べてみてください。まず匂いを嗅いでみてください。匂いを嗅いでみてください。匂いを嗅いでみてください。どう？食べて、食べて、食べてみて、食べてみて。はい、いいですか？大丈夫？大丈夫？うーん。おいしいね。はい。じゃあ、3つお茶用意するよ。Aのお茶。これBのお茶。これBのお茶。はい。いいですか？Bのお茶。はい、Aのお茶。3回配るからどれが、タイグウェンのお茶か当ててくださいね。はい、今Bのお茶。Bのお茶。ノートの下に書いてください。Bのお茶は日本かタイグウェンかイギリスか。はい、Bのどれかな。Bのお茶どれかな何かな。私も飲めるかな。まず匂いだよ。匂い。匂い嗅いで、匂い。匂いだよ。匂い。匂いからやって、匂い。匂いだよ。うーん。校長先生もやります。校長先生もやります。当たるかな。校長先生もやります。これはどこのお茶かな？どこのお茶かね？どこのお茶かね？

C　「日本かな？」

善元　「はああ。」

C　「イギリスじゃないかな？」

善元　「じゃあ、いい？飲み終わった人は今度はAのお茶を取りに来てください。どうぞ。Aのお茶取りに来て。自分で。」

—子どもたち、それぞれお茶味わう

善元　「いい？お茶を飲むときにはまず匂い。」

善元　「タイグェンのお茶だと思う人？（AかBどちらかを指している）」

—子どもたち、誰も手を挙げない。

善元　「おおっ？！これがタイグェンのお茶だと思う人？（AかBどちらかを指す）」

—子どもたち、挙手

善元　「うわあっ。すごいねえ。」

～拍手～

善元　「同じお茶でも、同じお茶でも、採れる場所によってお茶の味が違います。皆さんも、タイー族の人もいます。フモン族の人もいます。違います。みんなお茶

です。みんなお茶。同じ人間。はい、それでは言います。じゃあ、イギリスのお茶どれだかわかった？」

（ここで残念ながら、ビデオのバッテリー切れとなってしまった。）

お茶当てクイズをしたあと、タイグェンのお茶をすぐにみんな利き分けたことから、自分の地域の産物についてふだん自覚してはいないけれど、感覚の上ですでに誇りを持っていることを確認しあった。後は学習指導案通り授業を進め、お茶のたどった道を確認した後、人類の移動の道を確認した。さいごに、沖縄の人の働く人の笑顔の写真（さとうきび畑など）を見せ、この地域の働く人の写真との親近感を共有し合い、終了した。

子どもたちが授業の中で書いた作文（2010年9月8日）

①僕の両親は朝早くから森へ行って仕事をします。昼には一度家へ戻ってきますが一日の仕事の半分しかまだ終わっていません。それでも両親はうれしそうです。しかし山火事があった時はその年は森で何も採れなくなってしまいます。来年まで（材木になる）木が成長するまで待たなければなりません。そんな時も両親は毎日森へ行って仕事をしています。

今日の授業はとっても楽しかったです。僕はこういう授業がすごく好きです。

②私の両親は農業をしています。両親は毎日一生懸命働いていますが、残念ながら旱魃にあってお米を出荷できないことがあります。そんな時両親はすごく悲しみますが、すぐに気を取り直してポンプで水を耕地に汲み上げて他の作物を作り始めます。ですから両親は来る日も来る日も朝から晩まで働いてくたくたになってしまいます。

私は勉強が上手になって将来は稲作技術について学びたいと思っています。その技術を身につけたら、また村に戻ってきてこの村からお米が世界中に輸出できるようになって世界の人たちが豊かになれたらいいなと思っています。

今日の授業はおもしろかっただけではなく、とってもためになりました。こんなに勉強になるのですから、是非また今日の先生たちにいつか会いたいです。

③私の両親は稲作をしています。両親は毎朝早く起きて楽しそうに仕事に行くのでとってもよく働きます。でも旱魃になると不作になってしまうので大変な仕事です。稲が実るまで稲を丈夫にするためにずーっと稲の世話をしなければなりません。米を収穫したら次は雑穀を植えます。そんな両親を私は尊敬します。

今日の授業は楽しかったので先生方に感謝します。また日本からこの学校まで来てもらいたいなと思ってます。

④僕の両親は農村で生まれ育ったので、両親の仕事は農業で稲作をしています。一年中鋤や鍬で耕さなければなりません。それでもやっと食べていけるだけの収穫しかない年もあります。他からは全然収入がないので僕を食べさせたり学校に行かせたりするのがやっとです。どんなに両親が仕事で疲れていても僕は両親が大好きだし、両親がしている仕事は立派で大切だと思います。人間は農業をすることでお米を手に入れて食べることができるので僕は農業を大切だと思います。僕は両親の気持ちを裏切らないように一生懸命勉強します。

今日の授業は楽しかったしためになりました。

①私の両親は森の中で働いています。森で植林を熱心に行ってまだ若くて青々とした木を切り出します。大変なことがあったりするとすごく疲れているように見えるけれど、二人で大変さを分けながら休まず仕事に行きます。雨の日は特に大変そうです。両親が少しでも楽になるように私は一生懸命勉強をしていこうと思います。

授業を終えて面白かったなぁと思ったし、日本の先生たちは上手だなぁと思いました。本当に今日はありがとうございました。

⑥私の両親は稲作をしています。仕事は大変ですが困難にくじけず一生懸命楽しく仕事をしています。でも旱魃で不作になってしまうと両親だけでなく私もがっかりしてしまいます。それでも両親はあきらめません。旱魃になって労働力が足りなくなった時も大変なんだろうなと心が痛み私は悲しくなります。今まで以上に私の家の収穫が増えたらいいなぁと思います。

今日の授業はとても興味が持てました。楽しい授業をしてくれてありがとうございました。

⑦僕の両親は稲作をしています。両親は楽しそうに仕事をしていますが一日中仕事をして

帰ってきません。姉も家で内職をして大変そうです。両親が帰ってきて僕が？？？？をすると楽しいです。そんな大変そうな両親をみていて自分は頑張って勉強をしなければと思います。

授業中ずっと楽しかったし、先生たちに会えたので今日は興奮しました。

⑧ 両親は稲作をしています。毎日一生懸命働いています。稲穂が実るまで手をかけなかればならないので両親は家には帰ってきませんので大変だと思います。だから私は学校で勉強ができるようになってよい点数を取ると両親はとっても喜びます。また私が籾殻を取る手伝いをすると、出荷できるようになるってお金に代えられるので両親は喜びます。

今日の授業はとってもためになりました。

⑨両親は稲作をしています。旱魃になっても水田へ行き一生懸命働きます。毎朝お母さんは水田へ行って昼間で働きます。昼からまた水田へ行って薄暗くなるころに帰ってきます。帰ってきたときのお母さんは、全身汗の粒でいっぱいですが笑みを絶やしません。私は勉強が良くできるようになって少しでも両親の手助けができればいいなと思います。

今日の授業は楽しかったしためになりました。日本の先生がいたので、日本についてなどいつもとはだいぶ違うことを勉強できました。

第2回日本・ベトナム共同授業研究会

２０１０年９月８日昼食後　　１４時～１５時３０分
クックドゥオン小学校校長室にて
参加者　Oanh 校長、Tao 先生、Hoa 先生、Nhung 先生
善元、西岡、村上
通訳　那須、**記録**　儀間

Oanh校長　まず、西岡先生の授業は個人的に直感的に思ったのはですね。非常に、子どもたちがいつもよりも、積極的な態度を示して、先生が示した内容を全て理解したという、そういう表情をしていたというのを直感的に感じました。

食べ物という極めて身近な題材を使われて、最初、例えばフォーだとかいう自分たちのいつも食べている食べ物から、他の国の料理に広げていったことで、「ああ食べ物には、そういういろんなものがあって多様なんだな」というふうに発見させていったことが子どもたちが理解しやすかったと思います。そして、世界で色々な食卓があることが、もう一回ベトナムに引きつけてみると、地域の差とか民族の差で、食卓も違いがあるんだなという、国の中でも多様な文化、多様性があるんだなということに振り返ることができると思います。

それから、食べ物だけでなく写真を使った時に、その一家の全員の姿が写っている写真を使われて、子どもたちは一つの家族にどういう年齢のどういう世代の人達がいるのかとか、大家族なのか、または核家族なのか、そこから色んなものを読み取ったはずです。それを翻って今度、自分の国の家族や自分の家族と比較してどういう違いがあるのか、そして、もしかしたら何人かの子どもは自分たちが大きくなったときに、自分たちの国の家族形態、または自分の家族の家族形態が今日見た他の国の家族と、どう違うのか、また同じになっていくのか等々まで想像をめぐらした子もいたのかなと思います。

そして、常に西岡先生の口調が優しく、わかりやすい言葉で語りかけていたのが良かったし、最後に絵を描くという実際、作業ですね。作業を入れ込んだことが子どもたちには、家族というもの、食べ物というものの興味を一層増させたと思います。

つぎに善元先生の５年生のクラスも、これほど５年生のクラスが積極的になったのは見た事がないでした。非常に積極的に授業に参加しました。先生の今回のテーマが一番身近なところからベトナムに広がり、ベトナムからアジアだとかアフリカだとか最終的

には世界に広がっていったということで、子どもたちの視野が大変広がったと思います。

それから職業について触れられたときに、自分の両親の職業とまた、動物と人間の違いの時に、人間だけが仕事をしていくということで職業という意味を子どもたちが再認識する機会ができたと思うんです。そして、その職業のうち、お茶の生産に関わっている子どもがいるということで、お茶を使ったときに実際子どもたちが匂いを嗅いだり飲んだりすることでタイグェンのお茶以外のお茶というのを初めて子どもたちは体感したと思います。そのことによって、お茶という身近な題材からベトナムの国境を越えてお茶が存在するし、世界観が広がったと同時に、もう一度タイグェンのお茶というものを今までとは違う角度から認識することができる体験を子どもたちが持ったと思います。

労働の一番の根源を先生は、動物の足跡を探しに行くというところから始められて、それを自分の両親の仕事が何か、そして自分の両親の仕事をどう思っていますか、というふうに生徒に振ることによって、生徒は自分のご両親の仕事について自分で考える時間ができました。それで、作文を書く段になって、お父さんお母さんの仕事が楽しいけれどもたいへんなこともあるということを、もう一度、児童は対象化することができて、お父さんお母さんの仕事は自分の家族のためにしてくれているんだなあとか、またそれがひいては地域とか国のためにつながっているんだなあというところまで感じた児童もいるのではないかと思います。

そして先生の授業を通して、子どもたちは自分の位置というのは家族の中の位置という意味を越えたベトナムの中での位置だとか、または世界の中での位置というようなものも認識し、そして今度、家族という単位で、もう一度自分の位置とか自分の家族の存在を食べ物とか労働を通して今まで見なかった角度から認識することができたのではないかと思います。

そして本来ならば西岡先生、善元先生がやられたような、あらゆる道具や教材を使った授業というのを私たちも取り入れるべきだと思うんですが、校長の立場から言わせて頂くと、やはりこの地域に生きる先生たちは、すぐ皆さんお二人と同じような授業をすることは難しいと思います。毎日の一時間一時間の授業でそれだけの教材や資料を集めて毎日このような授業をするだけの収集する利便性がまだこの地域にはないからです。

2 回に渡って西岡先生、善元先生、ここで授業されたことで、子どもたちはクックドゥオン、そしてベトナムそして日本もしくは沖縄というような世界観が広がったことは確実とみています。それは非常に校長としてありがたいので感謝申し上げるとともに、そういった子どもたちの世界観を広げるために今回で終わりにするのではなくて引き続きそのような授業の機会を、皆さんがして頂く授業のような機会を設けられたらと思い

ます。以上です。

Thao先生　まず、二人の授業を見させて頂いて準備が相当きめ細かいなという感じがしました。準備はきめ細かいんですけれども、実際授業が始まると非常にお二人の先生とも緊張感なく、口調がすごく柔らかで優しいのが印象的でした。私も教壇に立つ身として、そういった授業するまでの裏の作業、そして授業が始まった後のそういった柔らかな雰囲気というものをもっと勉強したいと思います。以上でございます。

Hoa先生　お二人の授業を見て、どうしてここまで児童たちが主体的になれるのかというのは、びっくりしました。自分としても子どもたちが中心となって 50 分の授業を運営できるようスキルをこれからも身につけなければいけないなと肝に命じました。以上になります。

Nhung先生　私はお三方が発表されたことに同感の点が多々ありますが、その部分は省いてお三方が発表されなかったことで私が感じたことを申し上げます。

まず、西岡先生の授業は「食」という切り口でベトナム民族、ベトナムの食から外国の食へ広げていき、常に生徒たちにその食品とその家族たちを意識させながら自分たちで、自分の頭でこの家族はどこの国の人なのか、どういう家族構成なのか、何を食べているのか、１枚目の写真と２枚目の写真で食べ物がどう違うのかというふうに常に自分の頭で考えるような授業時間づくりに腐心されたと思います。

そして、授業を進める先生の姿勢としては常に児童への積極的な働きかけが一貫していたと思います。それはどういうことかというと、まず一つ目は西岡先生は常に一人一人の生徒とコミュニケーションをとっていました。全体に話しかけるのみならず、出来る限り一人一人の生徒とコミュニケーションをとるようにしていたことが積極的姿勢と思ったことが私の印象です。

二つ目は例えばスクリーンで写真を見せる時とか、地図で何かを説明する時、先生がまず説明してしまうのではなくて、子ども自らが、地図から何かを発見する、写真から何かを発見する、そのように仕向けたことが積極的姿勢と私は思いました。先生が全てを教えるのではなくて先生はあるものを提示して、そこから子どもたちが何を発見するかという姿勢を一貫してとられていました。また三つ目は2年生というクラス、つまりまだ低学年のクラスということを西岡先生は極めて意識をされて、難しい言葉とか難しい知識や情報を敢えて今回教えようとはせず、常にクラスの雰囲気を柔らかくユーモアをもって、時には笑い声を出せるような雰囲気で 50 分間を進めたことが 2 年生にとって、50 分の授業を続けられた大きな要因の一つだと思います。

50 分間常に柔らかい雰囲気で授業ができた成功の一つの要因として、最初から机を

合わせてグループ分けしていたことが良かったと思います。聞くだけの受け身の形ではなくて、隣の人とおしゃべりしたり、前の人と顔を見合わせながら相談ができるという、そういった教室作りを最初からしていたことが良かったと思います。

さらに、その、いい雰囲気で50分が過ごせた理由のもう一つは色々な教材を使うんですが、それを重ね合わせて使っていったことが良いと思います。つまりこういうことですね。スクリーンに写真を映しながら、この写真はどこの国かということで、地図も副用する。または作文を書く時に机の上にある写真を参考にしながら書くとか。どうしても今までのベトナムの先生方は、確かに色んな教材を活用します。しかしそれは、単発に例えば地図を黒板に張って地図の説明に終始して取り下げたりとか写真を見せて、はいこの写真はこれですと言って終わったりしますが、それを多重的に先生は使ったので子どもたちの興味は持続したんだと思います。

また、絵を描く前段階で先生が色んな国の写真を見せた時に例えば、「ここにフランスパンがあるでしょ。ベトナムにあるフランスパン、このアフリカでも使っているでしょ。」というように個々の食品を示しつつ、それは結局その国の文化と非常に密接な関係があるというふうにつなげられましたね。例えば日本だとかベトナムではお米が主要な食べ物であり、アフリカなどは他の穀物であるパンなどが主要な食べ物であるというふうに、食べ物の裏側にある文化にまで話を少し持っていかれました。それが最後に絵を描く段になって、若干の生徒たちの中で、そういうことを意識して描いた絵がいくつか散見されました。つまりそれはどういうことかというと、自分の家の食卓にのぼってくる食べ物というのは、結局はその自分の家族が位置している周りの自然から得た恵みであるというところで、食卓にのぼる食べ物の違いがあるんだということですね。

例えば、いくつかの子どもたちの絵の中には「すずめ」、飛んでる雀がありましたが、

村上　ええ、雀ね。

Nhung先生　これは言ってみれば山の食べ物です。例えば私は沖縄に行きましたが、沖縄は島嶼圏でありますからたくさんの魚料理を見ましたが、ここにいる子どもたちは雀を描くことで、または野菜も結構出ていました。雀や野菜を描くことで食卓にのぼる食べ物というのは、自分たちが住んでいる自然から頂いているんだということまで、絵から読み取ることができました。

ですから、西岡先生も例えばまた2年生のクラスで引き続き授業ができるような機会がおありになったとすれば、この点をより発展的にしてくと生徒たちにとっては非常に深い授業になると思います。つまり、どういうことかというと、自分たちの食卓に上る食べ物は、周りの自然から頂いているということなので、今世界的には地球環境問題が

ありますので、自分たちの周りの自然を守らなければ自分たちの食卓に食べ物も上ってこないんだということだと思いますね。

私が沖縄に行った時、沖縄では、さっき言った魚のみならず多くの海藻を食べました。この海藻というものも、沖縄の周りの海が汚くなって汚染されてしまうと沖縄の食卓には上らないわけで、同じようにこの地域で山林が破壊されていくと、そこに生息する雀も減っていくわけです。自分たちの食べる物と食卓と周りの自然環境というのが密接につながっているわけから、できうるならば、そういった自然、地球環境を保護するような問題にまで発展させる授業が、もし次回引き続き先生がされるならば、できるぐらいの深いテーマだったと思います。

それから、もう一つ先生の授業で発展させることができればと思った点があります。それは4つの写真を先生は敢えて選ばれましたが、それを私が見て感じたことは、例えばアフリカは大家族でありますが、大家族なのに比べて周りに置いてあった食品の種類というのは少なかったです。それに対して日本やアメリカの写真は核家族で家族人数が少ないにも関わらず、ものすごく多量の食品群が並んでいました。この現象ですね。つまり少ない人数なのにこれだけの食品があふれている。大家族なのに非常に種類が少ない食べもの、というところから何を読み取るかということも非常に大きいテーマだと思いますね。

最後に一言申し上げますが、そういった非常に西岡先生としては、その裏に大きなテーマを含んだものを今回持って来られたと思いますが、もし次回やられる時、そういった環境問題だとか、人口の差異と食糧問題とかいうテーマでやられたとした場合、おそらくこのクックドゥオンの小学校の生徒たちは、そのへんの問題を理解できるのかなというところがクエスチョンですね。非常にクエスチョンだと思います。

善元　できる。できる。できる、できる、できる。

西岡　ありがとうございます。

Nhung先生　つぎは善元先生の授業を見てですが、私は今回の先生の授業には 3 つの目的があったと思います。

一つ目はこの地域の産物をとおして、もう一度自分たちの故郷とか、またはその産物を生産することに携わっている両親のことを振り返ってみて、この故郷を愛するまたは両親を愛する、そういった自尊の感情を高めることが一つ目の目的だったと思います。

二つ目は職業とは何かと、それをもう一度根源に立ちかえって、人間が仕事をするという根源に立ちかえらせること、職業の意味とは何かということに振りかえらさせることが二つ目だったと思います。

三つ目は、現物を使ってその匂いを嗅いだり飲んだり、そういった五感を使って非常に五感をフルに活用させながら、それを作文という文章作成にぶつけていって、より豊かな、より具体的な文章が書けるようにもっていったことだと思います。これが三つの目的だったと思います。

それから授業の進め方としては、子ども自らが考えたり発見したり、イメージを膨らませたりという授業方法に終始されていました。これは先ほどの西岡先生の時も同じでしたが、例えばグループ学習を、グループで話し合って意見を、みんなの意見を出し合ったりとか、または先生が質問すること、クイズを出すことによって子どもたちが頭の中でグルグル考えて、意見を手を挙げて述べる。常に子ども側が自らが主体的になるスタイルをとられていました。それから授業の雰囲気も終始エキサイティングな、子どもたちが非常にハッスルするような雰囲気になれたことの一つとしては、最初から机の三分の二ぐらいを出して、空間をずうっと前の方に寄せて、更に子どもたち同士も話し合えるような机作り、机型にしたことが一つだと思います。

善元　いいね。

Nhung先生　二つ目は、先生の話し方の、いわゆるメリハリといいましょうか。時には興奮したような、時にはトーンを下げて静かに喋るような。そういった常に子どもたちの耳をそばだてるような話し方をされることによって、ひいてはそれが子どもたち自身が考えて、発言するような方向に導いたんだと思います。

そしてもう一つ特徴的だったのは、色々な教材を提示しただけでなくて、その教材を五感を使って生徒たちに体験させた。触らせます、匂いをかがせます、よく観察させます、口に入れさせますということですね。五感を使わせたことです。五感を使わせたことで、もう一度、普段あるものを違う角度から認識させることができたと思います。

そして、この労働とは何かというところ。これは本当ならば非常に難しいテーマのはずなんですが、これを先生はうまく去年の授業から今年の授業に移行させる過程で労働とは何かという問題を提示されました。つまり、去年は人間と動物の違いは何ですかということに重点を置かれましたが、今日はその時いくつかの写真を使って、人間というのはまず言葉を使うんだよ、それから仕事をするんだよ、それから足跡を見ることによって、足跡から、あっ向こうの方向に自分たちが食べる食糧の動物が逃げて行ったんだなという知恵を働かすことができるんだよ、というようなことを提示した中で労働の意味というものを出してこられました。これは極めて去年から今年にかけての授業の振り返りの中で出されたことで、スムーズに子どもたちの頭中に労働の概念というものが定着したと思います。

ということで私が最初に申し上げた、先生の3つの目的というのは、子どもたちの中でスムーズに頭に定着したし理解が十分できたと思います。

それから、あとですね自尊心を高めるという点で私が良かったなと思うのは、お米のことを先生が取り上げましたね。

善元　うんうん。

Nhung先生　正直言って、ベトナムは世界全体的にはまだ発展途上国、開発途上国と言われていますが、その中でもお米の生産、輸出だけは今世界第二位になっています。いわゆるそういうまだまだ相対的に、世界の国の中では相対的地位は低いにも関わらず、お米は輸出して、そして今日、教壇に立った日本人の口までそれが運ばれているんだよということを示されたことで、子どもたちは稲作に従事している生徒が多い、ご父兄が多い中で、その仕事が実は世界につながっていくんだという自負心が持てたと思います。

自尊心という点で言うと、タイグェンの生産したお茶というものと自分の両親の労働という、この二つを柱に話を進めたことで子どもたちとしては、もう一度自分の身近にいるお父さんお母さんを見る目、または身近にあるタイグェンのお茶というものを再認識することができるでしょう。それはひいては自分が住んでいるこの故郷、クックドゥオン、ボーニャイ郡を、もう一回見直すことで自尊心と言いましょうか、故郷愛といいましょうか、そういったものが芽生えると思います。

その他に、お茶の時にですね、触ったり口に入れたりという時にですね、先生が全部そこに持っていくんじゃなくて、Aのお茶を飲み終わったら取りに来てくださいということで自分が主体的に動く、自分が飲んだら自分が行動していくという、いわゆる一般の授業形態から逸脱したことで子どもたちの主体性、積極性を出されたと思います。

それがひいては私は授業が終わった後も作文をずっと書き続けている子がいましたけれども、やっぱりそれだけ何か自分から表現したい書きたいという気持ちが表われたんだと思います。

善元　うん。そうです。

Nhung　ということで最後もう一言だけ付け加えさせて頂きますが、二人、西岡先生、善元先生とも非常に色々な教材を駆使して、そしてそれが十分子どもたちがわかるレベルでの教材を使われたことで、お二人の先生の授業の目的は、今回かなりの高い率で子どもたちに理解できたと思います。こういった授業スタイルは私たちベトナムの教員としては大いに学ばなければならないと思います。以上です。

西岡　どうも皆様、ありがとうございました。一番苦労したのは2年生ということで、どこまでわかってもらえるかなということをいろいろ考えてやったんですけれども、もう

少し学年が上でしたら、また話すことも少しまた変えようかなというふうには考えていました。いろんな協力をして頂いて良かったということと、今日お持ちした教材は Hoa 先生に渡してありますので、使ってください。

写真というのは実は日本では、日本のいろんな教材の研究のグループが作った最先端のものです。私も日本の小学校とかで、まだやったことないことをここで試さしてもらったので、ぜひまたいろいろですね、視点を変えてもらったらですね、深められる教材だと思いますので、また使って頂けたら嬉しいなと思います。どうもありがとうございました。

善元　今日はこういう授業をさして頂いて非常に光栄に思っております。私は教員やって、今日で多分四万二千時間くらいの授業をやってきました。それでですね、日本は今大きい問題を抱えています。

やはり教師はいろんなこと教え過ぎちゃうんですね。つめこみ授業があります。そこでどうしたら子ども中心の授業、ベトナムの教育改革もそうですけど、私たちも共通の課題を抱えていると思います。世界的な情報化時代において、教えることがどんどん多くなってくるんですけども、私はそれに対抗する軸として、やはり子ども中心主義により、自尊の感情をどうつけるかが一番大事だと思ってこの授業に臨みました。昨日の 3 時まで授業づくってました。まだ直感ですけれども、多分私たち人類は西の方から東の方に来たんですけど、もしかしたら文化で新しい東風が西の方に吹くのかなということを、ちょっと直感で思いました。授業つくる時に。だからオリエント、西方じゃなくね、アジアの何か新しい時代を作る予感を感じたってこと。

キーワードは人間の持ってる優しさだと思います。技術文化を越えるのはやっぱり最後は人間の優しさを共に分かち合えるかなってことだと思います。

今回授業と研究会として私たちは那須先生の優れた通訳があるってことですけれども、国境はないかなって気がします。私たちの間には。私たちはアジア人です。私たちはやっぱり人間です。何か繋がれる予感を実感を私は今回感じました。最後に一言、去年の男の子の名前なんだったけ？

村上　クウェンさんです。（家庭の経済的事情のためいったん休学し、年長でありながら小学校に通っている。）

善元　クウェンさんが、今日非常に良い答え言ってくれたんで、私はこの授業うまくいくなって思ったんですね。

もう一つはですね、授業終わった後に記念写真を撮るときにですね、フモン族の子が民族衣装、もう一回、脱いだのもう一回着て記念写真撮ったんですよ。ああ、自尊感情

ってこういうものなのかなって思ったんで、私は満足しております。ありがとうございました。考えれば必ず道はあると思いますよ。道をつくりましょう。

～拍手～

村上　私たちは、日本にいても、いつもクックドゥエンの山の緑の美しさも思い出しています。クックドゥエンは小さな山の小学校かも知れません。私たちの沖縄も小さな島です。しかし、そうした、本当に国境を越えてつながっているという時間を持てたことをたいへん幸せに、また意義深いことに思っています。今日は本当に子どもたちが私たちにとても友情を示してくれて、授業を一生懸命積極的に受けてくれたことがほんとうにうれしくて幸せです。これは校長先生はじめ先生方がいつも子どもたちを愛情深く教育しておられたそのお陰だと感じています。Xin cam on（ベトナム語で「ありがとうございます。」）

Oahn先生　最後にもう一言だけ言わせてください。先ほどの呂里先生のコメントを聞いて、あと二方の最後の一言ずつを聞いて、私が一つ確信したのは、善元先生が長い教員生活を通して日本も最初はいわゆる知識を一方的に注入する授業だったと。それを反省をして、子ども中心主義に見直したということを聞きました。それを聞くと私たちもこれからもできるんじゃないかという今確信が少しあります。

～拍手が起こる～

Oanh校長　というのは、Nhung 先生の分析が非常に今細かかったので、それをもう少し私たちも見直して、そして皆さんの授業を真似して、私たちが今いるスタッフではできないところは Nhung 先生や、またタイグェン師範大学の先生方と協力して、さっき先生がおっしゃった子ども中心主義に立つ授業づくりというものができるような気が少しずつ今してきました。

善元　いいですね。

～拍手が起こる～

Oanh校長　（続き）今ベトナムは教育改革の過程でありまして、小学校教育レベルを上げることに邁進していますが、その教育レベルを上げるという意味合いの取り方が色々あると思いますが、今日を通じてですね、それをさっき言った、子ども中心主義の授業を絡めての教育改革でありたいと思うので、これは今後クックドゥオン、タイグェン師範大学の先生方とも相談していきたいし、また今日のような刺激を今後も私たちは受けたいので、ぜひともこういった協力、両者の協力関係は今後とも続けていきたいと思います。何よりも子どもたちがですね皆さんのことを覚えていた。去年来たのを覚えていたことがその証だと思います。やはり子どもたちが覚えてくれるようなことをしてくれた

皆様方は、やっぱり今後とも私たちのよりよいパートナーであって頂きたいと思います。

（ベトナム語であいさつ）

善元　ありがとうございます。ほんとう、ありがとうございます。